

粕屋町文化財調査報告書第 51 集

内橋カラヤ遺跡第 2 地点
内橋カラヤ遺跡第 3 地点
内橋鏡遺跡 3 次

2020

粕屋町教育委員会

はじめに

本書は、県道福岡東環状線拡幅工事にともない、平成29年度と30年度に粕屋町教育委員会が実施した、粕屋町大字内橋、大字戸原に所在する内橋カラヤ遺跡第2地点・第3地点及び内橋鏡遺跡3次調査の記録です。

調査地周辺は古代の遺跡が多く存在し、甕棺墓群を検出した内橋鏡遺跡1次調査・2次調査や、銅鐵が出土した戸原鹿田遺跡などの弥生時代の遺跡をはじめ、前方後円墳の周溝を検出した古墳時代の内橋カラヤ遺跡第1地点、糟屋郡最大級規模の掘立柱建物や大宰府式鬼瓦が出土した内橋坪見遺跡、精巧で大型の横板組井戸と貴賓専用の精美な土師器が見つかった内橋牛切遺跡、多々良川の河口で物資集積施設として栄えた多々良込田遺跡などの奈良時代の遺跡が周囲にあります。さらに大宰府と都を結ぶ駅路が調査地近辺を通過していることからみましても、海上・河川・陸上交通が交わる重要な地域であったことがうかがわれます。

このような立地環境のもと、内橋鏡遺跡3次調査で、度量衡に関連する滑石製の「權」と、朝鮮半島文化との交流を示す「新羅土器」が出土したことは大きな成果といえるでしょう。

しかしながら、遺跡全体のうちのわずかな範囲を調査したに過ぎません。遺跡がどのような性格であったのかは、今後の周辺地域の調査によって次第に明らかになっていくことと思います。本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されとともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様から謝意を表します。

令和2年3月31日
粕屋町教育委員会
教育長 西村 久朝

| | |
|-----------|---|
| 発行 | 粕屋町教育委員会 |
| 調査起因 | 県道福岡東環状線拡幅工事 |
| 現地調査 | 【内橋カラヤ遺跡第2地点】平成29年9月19日～平成29年11月17日 平成30年1月15日～平成30年2月28日 【内橋カラヤ遺跡第3地点】平成30年7月17日～平成30年9月22日 【内橋鏡遺跡3次】平成30年7月17日～平成30年11月16日 |
| 整理調査 | 平成31年4月1日～令和2年3月31日 |
| 使用方位 | 座標北(国土座標第1系〔世界測地系〕)。西北に対して0°17'西偏。 |
| 遺構実測 | 西垣彰博、高橋幸作、朝原泰介、福島日出海 |
| 遺物実測 | 高橋幸作、朝原泰介、福島日出海、常盤拓生 |
| 製図 | 西垣彰博、高橋幸作、朝原泰介、上田津由美、峰松宏徳 |
| 遺構写真/遺物写真 | 西垣彰博、高橋幸作、朝原泰介 |
| 執筆 | 経過・位置と環境/内橋鏡遺跡3次 西垣彰博 内橋カラヤ遺跡第2地点 高橋幸作 内橋カラヤ遺跡第3地点 朝原泰介 |
| 編集 | 西垣彰博 |
| 資料整理 | 松永メイ子、毛利須寿代、上田津由美、常盤拓生、山下真美、峰松宏徳、水上良行 |

本書に関わる遺物・記録類は、粕屋町立歴史資料館にて収蔵・管理し、公開する予定である。



内橋鏡遺跡3次出土 滑石製 鏃

内橋カラヤ遺跡第2地点
内橋カラヤ遺跡第3地点
内橋鏡遺跡3次

目次

内橋カラヤ遺跡第2地点
内橋カラヤ遺跡第3地点
内橋鏡遺跡3次

01 経過・位置と環境

- 02 調査に至る経過
- 02 調査体制
- 03 地理的環境
- 04 歴史的環境

07 内橋カラヤ遺跡第2地点

- 08 遺跡の概要 (A区)
- 08 方形周溝墓
- 11 木棺墓
- 11 包含層
- 11 その他の遺物
- 11 小結 (A区)
- 12 遺跡の概要 (B区)
- 13 溝状遺構
- 16 包含層
- 18 小結 (B区)
- 18 おわりに

19 内橋カラヤ遺跡第3地点

- 20 遺跡の概要
- 20 掘立柱建物
- 23 溝
- 26 石器
- 26 おわりに

27 内橋鏡遺跡3次

- 28 遺跡の概要
- 31 掘立柱建物
- 31 土坑
- 42 包含層
- 43 ピット出土遺物
- 43 おわりに

45 図版

経過・位置と環境

同時代の周辺の調査道跡

| | |
|----------|--|
| 内橋坪見道跡 | 『内橋坪見道跡概要報告書』柏屋町教育委員会 2013 『内橋坪見道跡 3次』柏屋町教育委員会 2015 『内橋坪見道跡 1次・2次』柏屋町教育委員会 2019 |
| 内橋牛切道跡 | 『内橋牛切道跡』柏屋町教育委員会 2013 |
| 内橋登り上り道跡 | 『内橋登り上り道跡』柏屋町教育委員会 1994 『内橋登り上り道跡第2地点』柏屋町教育委員会 1997 『内橋登り上り道跡第3地点』柏屋町教育委員会 1997 『内橋登り上り道跡第4地点』柏屋町教育委員会 2001 『内橋鏡道跡』柏屋町教育委員会 2015 |
| 内橋鏡道跡 | 『内橋鏡道跡 2次調査・内橋カラヤ道跡』柏屋町教育委員会 2017 |
| 内橋カラヤ道跡 | 『阿志官衙道跡(国史跡)』阿志道跡』柏屋町教育委員会 2018 |
| 阿志茶屋道跡 | 『阿志茶屋道跡』柏屋町教育委員会 2020 |
| 阿志原口道跡 | 『阿志原口道跡』柏屋町教育委員会 2004 『阿志原口道跡第2地点』柏屋町教育委員会 2010 |
| 阿志古屋敷道跡 | 『阿志古屋敷道跡』柏屋町教育委員会 1995 |
| 阿志天神森道跡 | 『阿志天神森道跡』柏屋町教育委員会 1996 『阿志天神森道跡第2地点』柏屋町教育委員会 2016 |
| 江辻道跡 | 『江辻道跡第6地点』柏屋町教育委員会 2002 |
| 戸原御堂の原道跡 | 『戸原御堂の原道跡』柏屋町教育委員会 2000 |
| 戸原寺田道跡 | 『戸原寺田道跡』柏屋町教育委員会 2017 |
| 原町平原道跡 | 『原町平原道跡』柏屋町教育委員会 2019 |

経過・位置と環境

調査に至る経過

内橋カラヤ遺跡第2地点、内橋カラヤ遺跡第3地点、内橋鏡遺跡3次は、福岡県糟屋郡粕屋町大字内橋字鏡637-5他において、県道福岡東環状線拡幅工事が計画されたことに起因する。

内橋カラヤ遺跡第2地点の経過

平成29年3月14日に、福岡県福岡県土整備事務所より粕屋町教育委員会へ埋蔵文化財事前審査願書が提出された。申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である内橋カラヤ遺跡に含まれる旨を回答した。平成29年3月22日～24日および6月19日に確認調査を実施したところ、隣接する内橋カラヤ遺跡第1地点の遺構が広がっている状況を確認した。確認調査の結果をもとに福岡県福岡県土整備事務所と協議を重ねたが、工法計画の変更は難しく、記録保存の発掘調査を実施し、調査終了後に工事着手することとした。

発掘調査は、A区とB区に分けて実施し、A区の調査は、平成29年9月19日～11月17日、B区の調査は平成30年1月15日～2月28日の期間において実

施した。

内橋カラヤ遺跡第3地点の経過

平成30年2月28日に、福岡県福岡県土整備事務所より粕屋町教育委員会へ埋蔵文化財事前審査願書が提出された。申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である内橋カラヤ遺跡に隣接している旨を回答した。平成30年3月13日～15日に試掘調査を実施したところ、隣接する内橋カラヤ遺跡の遺構が続いている状況を確認した。試掘調査の結果をもとに福岡県福岡県土整備事務所と協議を重ねたが、工法計画の変更は難しく、記録保存の発掘調査を実施し、調査終了後に工事着手することとした。

発掘調査は、平成30年7月17日～9月22日の期間において実施した。

内橋鏡遺跡3次の経過

平成30年3月16日に、福岡県福岡県土整備事務所より粕屋町教育委員会へ埋蔵文化財事前審査願書が提出された。申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である内橋鏡遺跡に含まれる旨を回答した。平成30年3月22日に確認調査を実施したところ、隣接する内橋

鏡遺跡1次・2次の遺構が広がっている状況を確認した。確認調査の結果をもとに福岡県福岡県土整備事務所と協議を重ねたが、工法計画の変更は難しく、記録保存の発掘調査を実施し、調査終了後に工事着手することとした。

発掘調査は、平成30年7月17日～11月16日の期間において実施した。

以上、3遺跡の報告書作成に係る出土遺物整理作業は、平成31年4月1日から令和2年3月31日の期間において実施した。出土遺物及び図面・写真等の記録類は粕屋町立歴史資料館にて保管している。

地域住民の方々には調査の趣旨にご理解を得るとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

調査体制

平成29年度・30年度
(発掘調査)
調査主体 粕屋町教育委員会
教育長 西村久朝
教育委員会事務局次長 大石進
社会教育課長 新宅信久

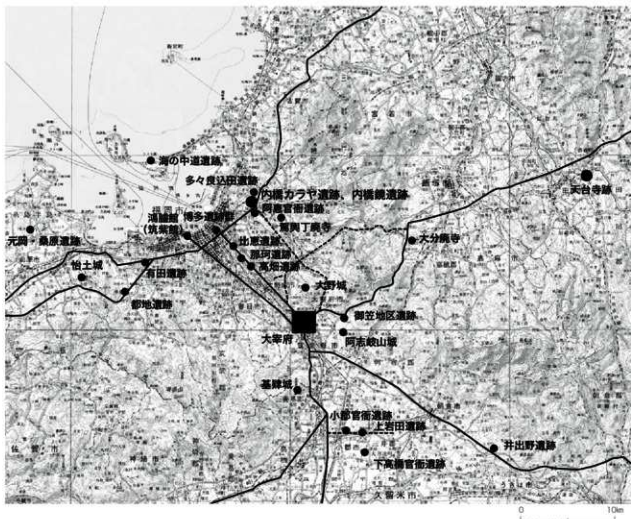


図1 調査地位置図 (1/400,000)

同課文化財係主幹 西垣彰博
同課同係主事 高橋幸作
同課同係嘱託職員 福島日出海、
朝原泰介、毛利須寿代
同課同係臨時職員 松永メイ子

令和元年度(出土遺物整理調査)
調査主体 粕屋町教育委員会
教育長 西村久朝
社会教育課長 新宅信久
同課文化財係主幹 西垣彰博
同課同係主任主事 高橋幸作
同課同係嘱託職員 福島日出海、
朝原泰介
同課同係臨時職員 松永メイ子、
毛利須寿代

調査作業員 (50 音順)

今泉一成、上田津由美、大西治、
梶原千聖、木下信之、木下眞彦、
古賀秀康、児島宏、酒井満、坂本
陽市、相良菜央、佐藤祐子、武田
雅晴、田村克博、常盤拓生、西田
和子、福田泰三、前田勝彦、松本
恵子、水上良行、峰松宏徳、安武
曜一、山下真美、吉村明

地理的環境

福岡県糟屋郡粕屋町は、福岡市の東に隣接し、粕屋平野の中央に位置している。町域は14.13km²と狭く、大半が平坦な地形である。粕屋平野の西は博多湾に面し、

南側は四王寺丘陵部によって福岡平野と区分される。東側の三郡山地を源とする3本の河川が平野を貫流し、北から多々良川、須恵川、宇美川の順で博多湾へ注いでいる。平野の北側には立花丘陵部があり、博多湾に面して周りを山地で囲まれた小さな平野である。平野内は東の三郡山地から舌状に派生する低丘陵が多く伸びているため、平坦な地勢の割に沖積地は河川流域に限られている。

内橋カラヤ遺跡、内橋鏡遺跡は、福岡市との町境に近い多々良川下流域の微高地上に立地している。古代の周辺環境は、多々良川・須恵川・宇美川の合流する河口付近が、入江状の内海を形成していた

と想定されている。遺跡はこの内海に近く、博多湾と3本の河川を利用した海上・河川交通の集中する場所にあたる。

歴史的環境

粕屋町周辺は、博多湾東岸に位置するという立地環境もあり、早くから大陸・朝鮮半島との交流が認められる地域である。多々良川流域には、松葉里型住居で構成された渡来系稲作集落である江辻遺跡が弥生時代早期に登場する。

弥生時代中期には青銅器生産が知られる地域でもあり、多々良川対岸の上井遺跡群(福岡市)、多々良大牟田遺跡群(福岡市)では青銅器鋳型が出土している。粕屋町域でも、内橋坪見遺跡と内橋登り遺跡で青銅製鋳型が、戸原鹿田遺跡で銅鏝が出土しており、青銅器生産を基盤とした集落展開の様相が明らかになりつつある。

このような地域的まとまりを背景に、古墳時代になると多々良川流域に前期前方後円墳である戸原王塚古墳、内橋カラヤ古墳、名島古墳(福岡市)が築造される。その後、中期には首長系譜が途切れるが、後期になると推定全長75mほどの前方後円墳である鶴見塚古墳が須恵川流域に築造される。現況は宅地化が進んで半壊状態であるものの、近世地誌『筑前国統風土記拾遺』に江戸時代当時の鶴見塚古墳の状況が詳細な計測値とともに記されており、周溝を含めた全長約86m、後円部南側に横穴式石室が開口して内部に石屋形が安置されていることをはじめ、墳丘形態・石室規模なども克

明に読み取れる。これは那津官家の管掌者の墓といわれる東光寺剣塚古墳(福岡市)と同規模・同主体部であり、『日本書紀』継体22年の糟屋屯倉との関連が示唆される。

また、戸原寺田遺跡では、6世紀後半から7世紀前半(牛頭元年ⅢA~ⅣB)の遺物が出土する幅7.7mの断面台形の溝があり、紡いだ糸を巻き取る様^{ハシ}の腕木が出土している。その他にも、手工業に関わる鍛冶関連遺構を検出している。さらに、隣接する戸原御堂の原遺跡では同時期の倉庫群も確認していることから、大規模な区画溝をもち、周囲に倉ともない、手工業を抱えていた居宅と考えられる。また、遺跡名の「寺田」にも関わる東門寺(現伊賀栗師堂)が隣接し、瓦散布は確認されていないものの、古い寺院が存在した可能性も考えられる。このような居宅関連遺構は、官衛成立以前における家族支配体制の一端を示すものとして注目される。

粕屋町は、古代において筑前国糟屋郡に属し、須恵川下流域の阿恵官衛遺跡で糟屋評衛・郡衛が発見され国史跡に指定されている。

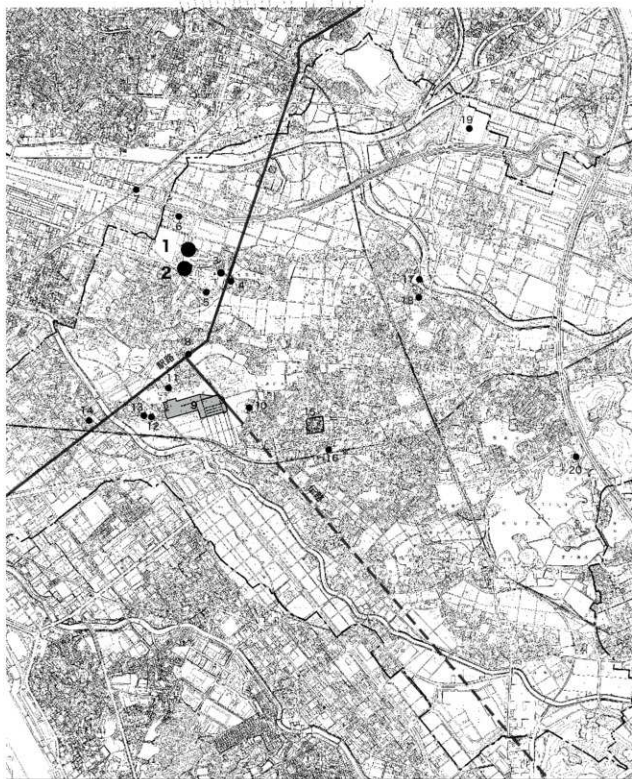
阿恵官衛遺跡は、7世紀後半から8世紀後半にかけて、政庁と正倉とという地方官衛の主要施設の全体像を捉えながら、評価の出現から郡衛の最盛期に至るまで地方官衛の変遷を追うことができる国内でも稀な遺跡である。さらに、698年の京都妙心寺梵鐘銘「糟屋評造春米連廣國」により糟屋評の長官の人物名が判明している。まさに、阿恵官衛遺跡の政庁において「春米連廣國」という人物が評造として政務をおこなっていたことが特定された。文字資料により評の長官名が判明していて、なお

かつ発掘調査によって評価の場所が明らかにされるのは、非常に稀であり、その歴史的価値は極めて重要である。

8世紀前半に阿恵官衛遺跡の政庁が移転した後(正倉は8世紀後半まで残る)、郡衛の移転先はいくつか候補地がある。谷を隔てた北側の微高地上にある阿恵原口遺跡は、阿恵官衛遺跡の政庁と同じ方位の官衛建物が直交に配置されている。周辺にも官衛建物が展開している可能性がある。また、阿恵官衛遺跡の東方約0.9kmの地点に1町四方の区画があり、『筑前国統風土記拾遺』では「長者の屋敷跡」と記されている。遺構は確認できていないが、区画の方位が阿恵官衛遺跡の政庁と同じであり、有力な候補地の一つである。さらに、「長者の屋敷跡」の南約100mにある原町平原遺跡では、大規模な柱穴をもつ大型の建物跡が発見されている。建物の主軸方位が正方位を向き、阿恵官衛遺跡の正倉群と同じであることから、8世紀後半の郡衛関連施設である可能性が高い。

官衛と古代道路の関係をみると、阿恵官衛遺跡は駅路と伝路が交差する衝に立地することが明らかになった。この駅路は大宰府と都を結ぶ大路であり、この駅路沿いに内橋坪見遺跡が位置する。内橋坪見遺跡では、大宰府式瓦、赤色顔料が付着した隅切軒平瓦など多量の瓦が出土し、大型の建物群と圍繞施設をともなうことから、駅家(駅守)の可能性が高いと考える。

粕屋町周辺は、郡衛、駅家、官道、港、寺院などがあり、古代史を考えるうえで鍵となる重要な要素をもつ地域である。



駅路推定線は、日野尚志「比恵・那珂道跡群を中心にして諸問題を考える」(『那珂38』福岡市教育委員会 2005)を参考とした。

1. 内橋カラヤ遺跡 2. 内橋横遺跡 3. 内橋坪見遺跡 4. 内橋牛切遺跡 5. 内橋登り上り遺跡 6. 戸原鹿田遺跡
 7. 多々良込田遺跡 8. 阿恵茶屋遺跡 9. 阿恵官衙遺跡(国史跡) 10. 鶴見塚古墳 11. 阿恵原口遺跡 12. 阿恵天神森遺跡
 13. 阿恵古屋敷遺跡 14. 「日守」地名 15. 長者の屋敷跡推定地 16. 原町平原遺跡 17. 戸原寺田遺跡 18. 戸原御堂の原遺跡
 19. 江辻遺跡第6地点 20. 黒岡丁廃寺

図2 調査地周辺の遺跡分布図(1/25,000)

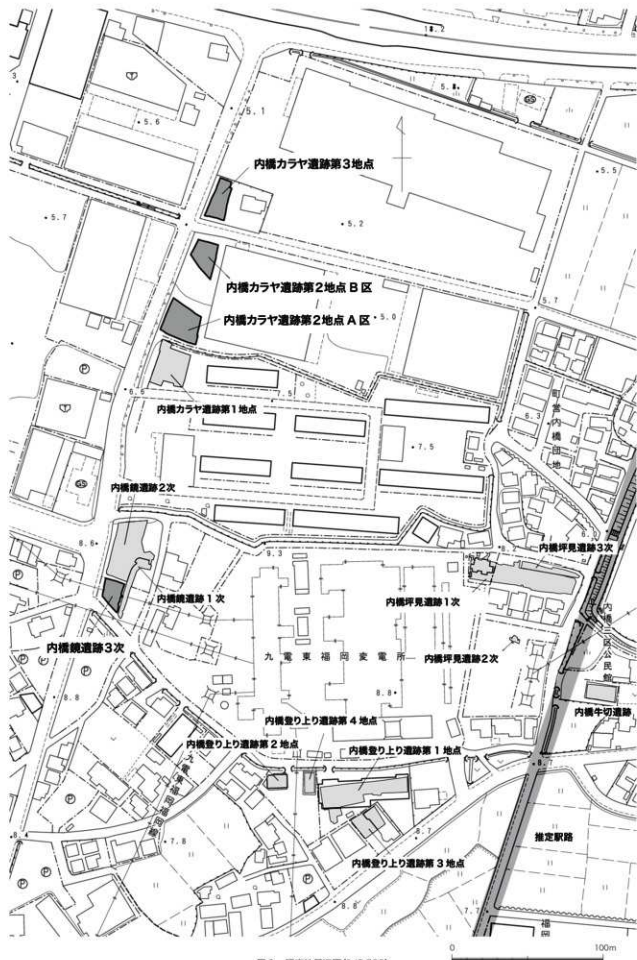


図3 調査地周辺図(1/2,500)

内橋カラヤ遺跡第2地点



内橋カラヤ遺跡第2地点A区全景(北から)

内橋カラヤ遺跡第2地点

内橋カラヤ遺跡第2地点は遺構のない範囲が広大であったため、2区において調査をおこなった。A区では弥生時代終末期の墓域を、B区では弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての灌漑水路を検出し、灌漑水路と並行して古墳時代に埋設する自然流路が流れる。

遺跡の概要 (A区)

内橋カラヤ遺跡第2地点は、A区において方形周溝墓、木棺墓を検出した。

内橋カラヤ遺跡第1地点で検出された墓域の広がり確認された。

方形周溝墓 (図3)

調査区の南西端で検出し、南北約5.6m、東西約2.8mを測り、調査区外へと延びる。第1地点で確認された方形周溝墓の約6m北に位置する。第1地点の周溝の方位が北を向くのに対し、本調査地の方形周溝墓は約25°東に傾く。また、削平を受けており、墳丘部分は検出されず、北東端の周溝も消失している。北側が比較的残りが良く、深さ約15cmを測る。

方形周溝墓出土物 (図3)

1は土師器の鉢。復元口径25.2cm、高さ15.4cm。外面口縁部はヨコナデ、体部は幅の狭い工具で器表面をかきあげる。内面口縁部はヨコハケ、体部は斜位のハケ。口縁部は強く外反し、底部は不安定な平底。全体的に褐色で、底部は黒く煤焦げる。2は土師



図1 内橋カラヤ遺跡周辺図(1/500)

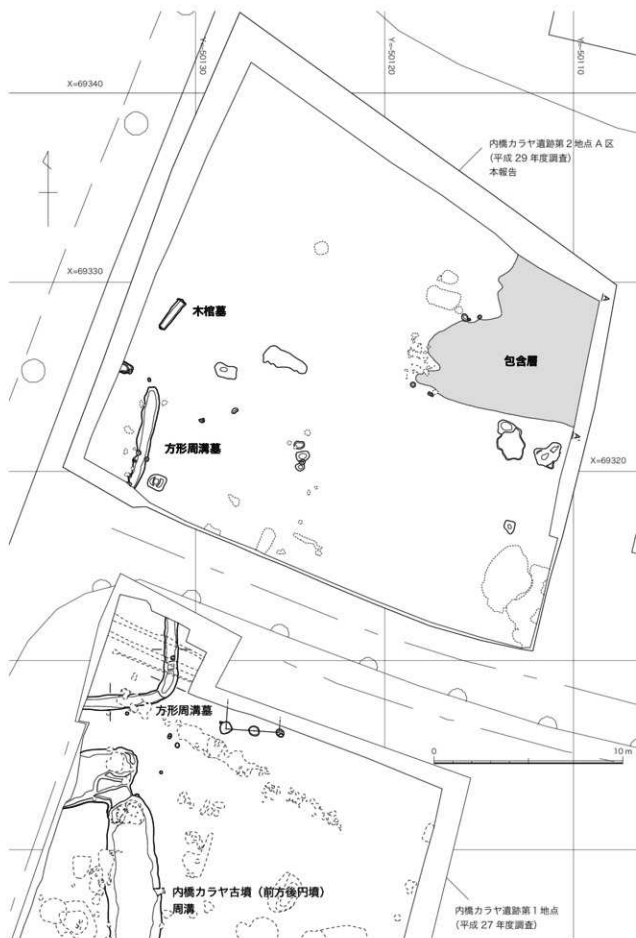


図2 内橋カラヤ遺跡第2地点A区平面図 (1/200)

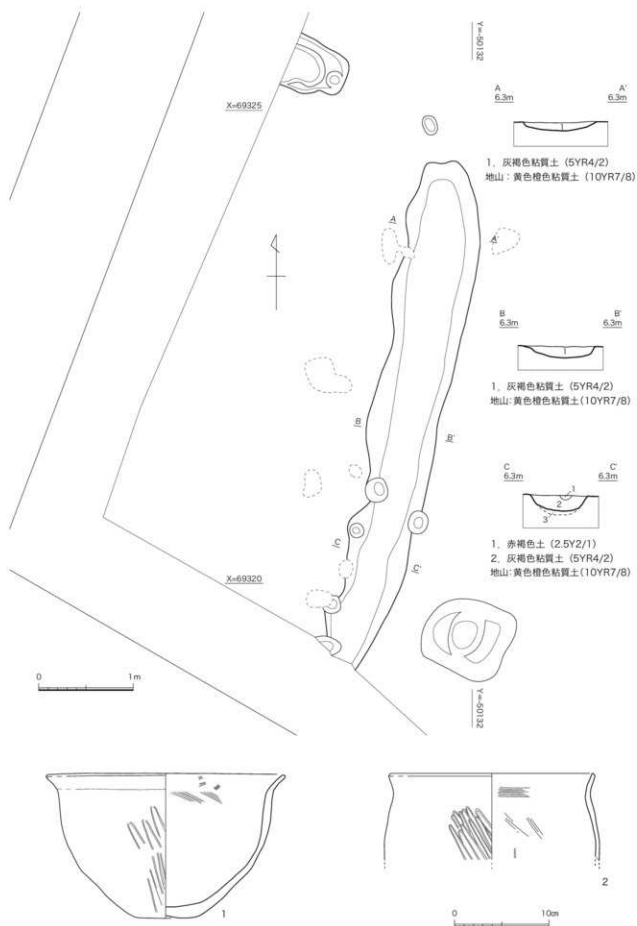


図3 A区 方形周溝墓平面図、断面図(1/40)、出土物実測図(1/4)

器の鉢。復元口径22.0cm、残高9.2cm。外面口縁部はヨコナデ、体部は1と同様に幅の狭い工具で器表面をかきあげる。内面口縁部はヨコハケ、体部は斜位のハケ。口縁部は緩やかに外反する。色調は内外ともに暗褐色。

木棺墓(図4)

調査地の西端で検出。長さ約1.92m、幅約49.6cm、深さ約32.8cm。長軸の上位にテラスを設けている。3層が木棺の痕跡と考えられ、木棺が腐食して崩れた際に2層と1層が流れ込んだと考えられる。

木棺墓出土遺物(図5)

1は黒曜石製の石鏃。長さ1.7cm、幅1.5cm、厚さ0.2cm。先端と脚部の一部を欠損する。1

層から出土のため、流れ込みの遺物と考えられる。

包含層(図2、図7)

調査地の北東端で検出。2層の耕作土、3層の整地層の下より検出。厚い部分で約40cmを測る。堆積状況から南側から流れ込んだと考えられる。

包含層出土遺物(図6)

1は甕棺の底部。残高は4.8cm。内外ともにマメツ。2は甕か壺の底部。残高5.7cm。外面はタテハケ、内面はナデ。

攪乱出土遺物(図6)

調査地南東端の攪乱より検出した遺物。表土剥ぎの段階で甕棺と思われる遺物を確認し、甕棺墓と想定して調査をおこなったが、近代の染付けが出土したため、攪乱と判断した。

4は甕棺。残高は6.2cm。内外ともにヨコナデ。5は弥生土器の甕。残高2.7cm。内外ともにヨコナデ。

この攪乱からは他にも甕棺と思われる器壁の厚い遺物が出土したが、細片のため図示はしていない。

小結(A区)

内橋カラヤ遺跡第2地点A区では木棺墓、方形周溝墓、甕棺遺物を検出した。本調査地に隣接する内橋カラヤ遺跡第1地点では、古墳時代前期の前方後円墳の周溝

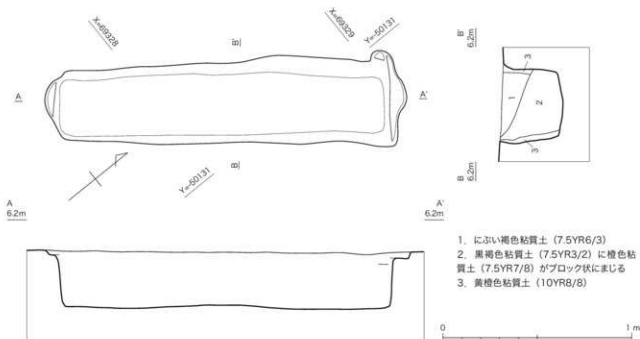


図4 A区 木棺墓平面図、断面図(1/20)

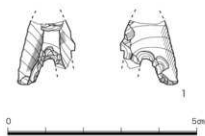


図5 A区 木棺墓出土遺物実測図 (1/1)

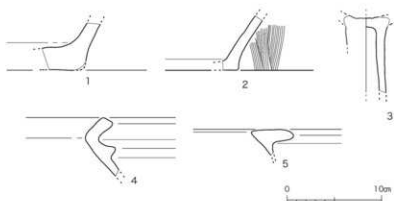
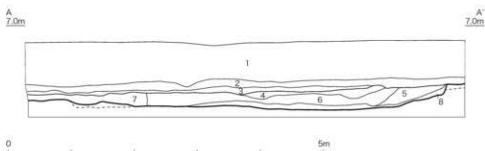


図6 A区 包含層、攪乱出土遺物実測図 (1/4)



- | | | |
|-------------------------|--------------------|---------------------|
| 1. 客土 | 6. 包含層 | 暗赤灰色粘質土 (2.5YR3/1) |
| 2. 耕作土か 灰褐色土 (7.5YR5/3) | 7. 包含層 | 暗赤褐色粘質土 (5YR3/3) |
| 3. 整地層か 褐灰色土 (5YR4/1) | 8. 包含層 | 黒褐色粘質土 (10YR3/2c) |
| 4. 包含層 | にぶい赤褐色粘質土 (5YR4/3) | 地山 |
| 5. 包含層 | 赤黒色粘質土 (2.5YR2/1) | にぶい黄褐色粘質土 (10YR6/4) |

図7 A区 包含層断面図 (1/60)

とともに方形周溝墓を検出しており、今回の調査で墓域の広がりも確認された。

また、本調査地の南約100mに所在する内橋鏡遺跡1次調査および2次調査では弥生時代中期の甕棺墓、木棺墓、土坑墓を、南東約300mに所在する内橋登り上り遺跡第1地点では弥生時代後期と考えられる土坑墓、木棺墓、石蓋土坑墓を確認しており、この地域一帯に弥生時代中期から古墳時代前期初頭にかけての墳墓群が形成されていたと考えられる。本調査地では包含層から甕棺の底部(図6-1)が、攪乱から甕棺の口縁部(図6-4)が検出されている。甕棺の口縁部は橋口編年

(1)のKⅢb式(立岩式)に該当し、弥生時代中期後半と考えられる。これは内橋鏡遺跡と内橋登り上り遺跡の間の時期に位置付けられると考えるが、攪乱出土遺物のため、参考資料としたい。

内橋カラヤ遺跡第1地点で古代の堅穴住居が確認されており、古代集落の存在も窺えるが、本調査地では古代の遺構を未確認であり、包含層からも須恵器を含む古代の遺物の出土は見られなかった。

(1)橋口達也『甕棺と弥生時代年代論』2005雄山閣

遺跡の概要 (B区)

内橋カラヤ遺跡第2地点B区では5条の溝状遺構を確認した。

本調査地の北約600mに位置する戸原鹿田遺跡でも大溝が発見されており、遺物の時期が同じであることから強い関連が窺える。

第1号、第2号溝状遺構は人工的な灌漑水路であり、第3号溝状遺構は自然流路、第4号溝状遺構は第3号溝状遺構が溢水した際にできた支流と考えられる。

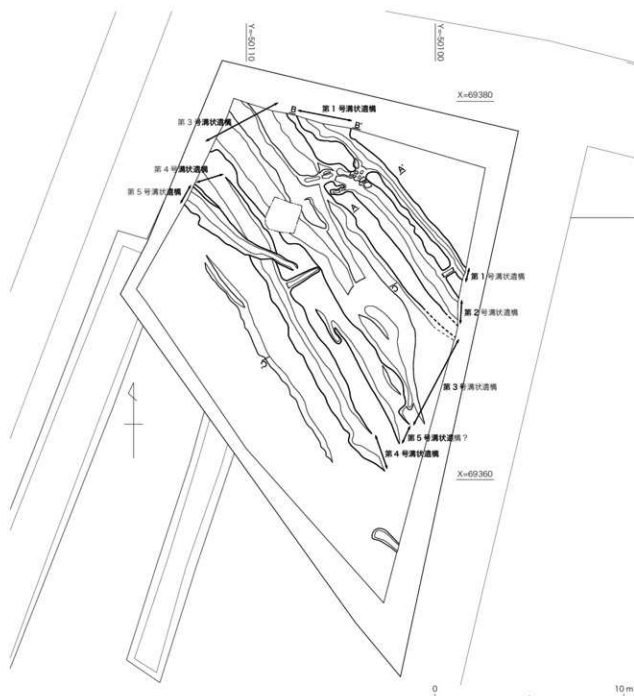


図8 内横カラヤ遺跡第2地点B区平面図 (1/200)

溝状遺構

第1号溝状遺構 (図8、図9)

調査地の北側で検出。南東から北西に向かって流れたと考えられる。南東側で幅約60cm、深さ約21cm、北西側で幅約29.4cm、

深さ約30cmを測る。第2号溝状遺構に取水するための水口を2箇所検出し、人工的に作られた溝と考える。出土遺物はない。

第2号溝状遺構 (図8、図9)

調査地の北側で検出。幅約1.2m、深さ約30cmを測る。第

1号溝状遺構の南側に並行して流れる。南東から北西に向かって流れ、第3号溝状遺構へと流れこむ。第1号溝状遺構からの取水口を有しており、第2号溝状遺構も人工的に作られた溝と考える。出土遺物はない。

第3号溝状遺構 (図8、図9)

調査地の中央を流れる大溝。幅約2.7m、深さ約15cm～40cm。南南東から流れ込み、調査地の東側で緩やかに北西へと向きを変える。その際、地面を削ったと考えられる底のくぼみを検出している。この大溝は土層の10層、11層に見られるように多く砂礫を含んでおり、その上層には

7層、8層、9層に見られる粘性の強い粘質土が堆積している。それに加えて、遺構の形状などを総合的に判断して、人工的な溝ではなく、自然的な流路と考えるのが妥当と思われる。

第3号溝状遺構出土遺物 (図10)

1は板付式土器の甕。復元口径23.8cm、残高11.0cm。口径

端部は緩やかに外反し、刻み目が施される。外面胴部はタテハケ、内部はマメツ。2はミニチュア土器。復元口径6.5cm、高さ4.7cm、底部径3.3cm。外面はマメツ、内面はナデ。3～9は弥生土器の甕、10は壺。3は復元口径23.4cm、残高3.3cm。内外ともにヨコナデ。4は復元口径19.2cm、残高4.3cm。外面口径部はヨコナデ、胴部はタ

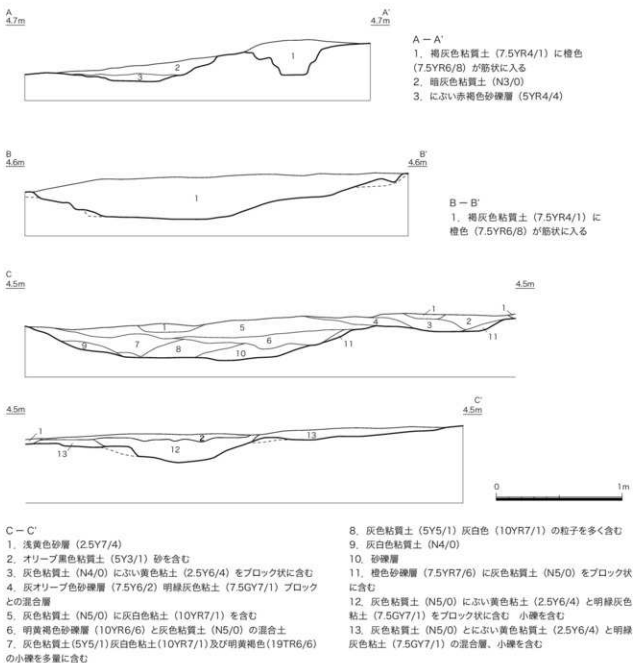


図9 B区 第1号～第5号溝状遺構土層図(1/30)

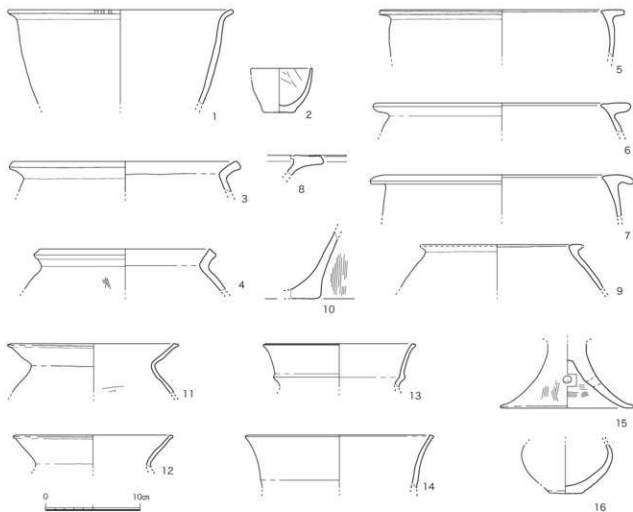


図10 B区 第3号溝状遺構出土遺物実測図(1/4)

テハケ。内面はナデ。5は復元口径26.0cm、残高5.0cm。内外ともにヨコナデ。6は復元口径27.2cm、残高3.0cm。内外ともにヨコナデ。7は復元口径28.0cm、残高4.4cm。内外ともにヨコナデ。8は残高2.1cm。9は残高7.1cm。外面はタテハケ、内面はナデ。10は復元口径18.4cm、残高4.9cm。内外ともにヨコナデ。11～16は土器器。11～12は甕。11は復元口径16.0cm、残高5.2cm。外面はヨコナデ、内面は口縁部がヨコナデ、胴部は横位のヘラケズリ。12は復元口径17.0cm、残高3.4cm。内外ともにヨコナデ。13は二重口縁壺。復元口径16.0cm、残高

4.6cm。14は直口壺。復元口径22.0cm、残高5.6cm。15は高杯。残高は6.8cm、復元底径は14.0cm。脚部に3箇所の穿孔がある。内外ともにタテハケで底部端部はヨコナデで仕上げられる。16は底径2.9cm、残高6.2cm。底部は丸みのある平底。底部と体部の境に稜があり、膨らみながら立ち上がる。内外ともにマメツ。

第4号溝状遺構 (図8、図9)

調査地の南側で検出。南東から北西へと流れていたとみられ、第3号溝状遺構と並行していたと考えられる。第3号溝状遺構と交わっておらず、関係性は不明だが、

第4号溝状遺構の形状が不鮮明であり、人工的に掘られた溝とは考えにくく、自然流路である第3号溝状遺構の支流と考える。

第4号溝状遺構出土遺物 (図11)

1は弥生土器で、下埴田式の甕。残高15.9cm。内外ともにタテハケ。外面には2条の突帯が付けられ、双方に刻み目が施される。突帯上部から外反していくと思われる。2は青銅製の筒状遺物で、第4号溝状遺構の中央部の底部直上で検出した。残長4.4cm、幅は下部が1.1cm、上部が1.0cmと下部が上部に向かって徐々に窄まる。厚さは0.1cmと薄い。表面

は暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)を呈す。暗オリーブ灰色が剥落した箇所にはぶい黄色(2.5Y6/3)で、所々金色を呈していたため、金属の成分分析を実施した。分析によると、検出されたのは銅、錫、鉛であり、青銅製品であることが判明した。また、光学顕微鏡による観察結果により、遺物の表面に擦痕が確認できた。この傷によって、地金の部分が露出していたものである。

第5号溝状遺構(図8、図9)

調査地の南西側で検出。レベル値を考慮すると、西から東へ流れたと考えられる。第1号〜第4号溝状遺構とは異なった方向となっており、別の溝とも考えられるが関連性は不明。形状も緩やかであり自然流路の可能性が高いと思われる(図8、図9)。

第5号溝状遺構出土遺物(図12)

1は刻目突帯文土器。復元口径は16.6cm、残高は8.5cm。口縁部に突帯がつけられ、刻み目が施される。体部中位に突帯が付けられていた痕跡が残るが、剥落する。口縁部から体部にかけて緩やかに外反するが、体部中位から内側へと屈曲する。外面は横位の条痕、内面はナデ。2は板付式土器。復元口径24.0cm、残高11.4cm。如意型口縁を呈し、強く外反する。口縁端部に刻み目が施される。口縁部から底部に向けて緩やかに内傾しながら底部へとつながる。外面はタテハケの痕跡が見られ、内面はナデ。3は弥生土器の甕。復元口径26.0cm、残高4.0cm。内外ともにナデ。4は土師器の甕。復元口径16.4cm、残高4.7cm。

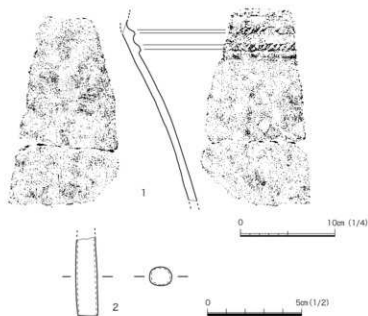


図11 B区 第4号溝状遺構出土遺物実測図(1/4、1/2)

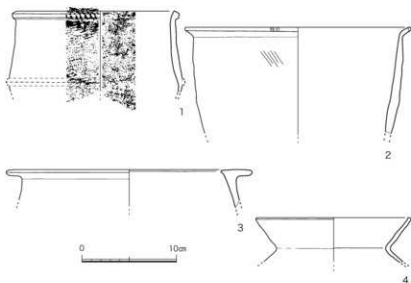


図12 B区 第5号溝状遺構出土遺物実測図(1/4)

内外ともにナデ。

包含層

調査地全体を覆う。粘性の強い黒色粘質土の下に小礫を多く含んだ灰色粘質土の層がある。この灰色粘質土の下より各遺構を検出した。

包含層出土遺物(図13)

調査当初は溝状遺構の存在を想定しておらず、包含層として全体を調査しており、各遺構上部も包含層として一部調査し、取り上げた遺物も含んでいる。

1は刻目突帯文土器。残高3.4cm 外面口縁部下に取り付けられた突帯は緩やかに下がり、刻み目が施される。内外ともに

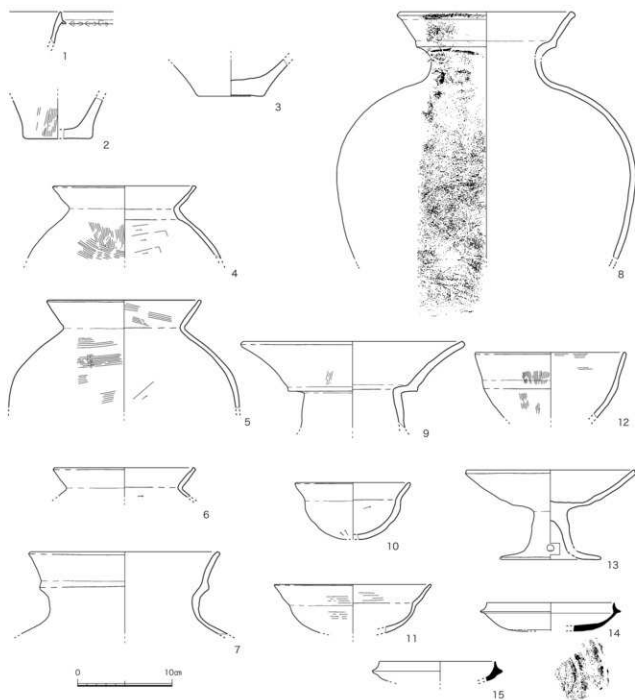


図13 B区 包含層出土遺物実測図(1/4)

マメツ。2、3は弥生土器の甕の底部。2は残高4.3cm、底径7.4cm。底部は平坦になっている。外面はタテハケ、内面はナデ。3は残高3.9cm、底径7.0cm。底部は端部から中央に向かって緩やかに上がる。内外ともにマメツ。4～13は土師器。4～6は甕。4は復元口径15.2cm、残

高7.7cm。外面は黒く煤焦げる。外面体部はタテハケ後ヨコハケ、内面体部はヘラケズリ。5は復元口径16.4cm、残高11.4cm。外面は黒く煤焦げる。外面口縁部はヨコナデ、体部はタテハケ後ヨコハケ、内面は口縁部ヨコハケ、頸部下部に指押さえが見られ、体部は斜位のヘラケズリ。6は復元口

径15.0cm、残高3.1cm。口縁部はヨコナデ、内面体部はヘラケズリ。7～9は二重口緑壺。7は復元口径20.2cm、残高8.6cm。外面口縁部付近に一部ヨコハケの痕跡が残るが多くはマメツ。8は復元口径18.8cm、残高25.9cm。表面は黒くすすこげる。外面は口縁部ヨコナデ、体部はタテハ

ケ後ヨコハケ、内面はヘラケズリ。9は復元口径24.0cm、残高9.2cm。外面に一部タテハケの痕跡が残るが多くはマメツ。10、11は小型丸底甕。10は復元口径12.0cm、残高6.0cm。内外それぞれ、口縁部はヨコナデ、底部はヘラケズリ。11は復元口径16.6cm、残高5.1cm。内外ともにヘラミガキ。12は鉢。復元口径16.0cm、残高7.0cm。外面はタテハケ、内面は口縁部ヨコナデ、体部は口縁部がヨコナデ。13は高杯。復元口径18.0cm、高さ8.5cm、復元底径は10.8cm。脚部に穿孔を施す。内外ともにマメツ。14、15は須恵器の杯身。14は復元口径13.6cm、残高3.0cm。底部にヘラ記号。15は復元口径11.8cm、残高2.1cm。

■ 小結 (B区)

内橋カラヤ遺跡第2地点B区は5条の溝状遺構を検出した。第1号溝状遺構と第2号溝状遺構は明確な掘り込み、取水口を確認でき、人工的に掘られた灌漑水路と想定される。第3号～第5号の溝状遺構は明確な掘り込みがなく、緩やかな形状を呈しており、自然流路と捉えられる。

本調査地の北約600mに位置する戸原鹿田遺跡でも第3号溝状遺構と同時期、同形状の大溝が発見されており、強い関係性が窺われ、本調査地の溝が北へと貫流し、戸原鹿田遺跡へとつながる蓋然性が高い。

戸原鹿田遺跡の溝3が大溝と平

行して流れ、水口を有している状況を判断すると、溝3と第1号溝状構は同一遺構の可能性が高い。

第4号溝状遺構と第5号溝状遺構は戸原鹿田遺跡でつながりを捉えられる遺構はなく、本調査地周辺で一時的に発生した自然流路の可能性が高いと考えられる。しかしながら、戸原鹿田遺跡の大溝内で中央から西にかけて溝状の隆起が見られることから、これが大溝が溢水し、周囲に支流を作った結果と考え、本調査地の第4号溝状遺構は第3号溝状遺構の溢水により発生した可能性が想起できる。第5号溝状遺構は方位が異なるため、別の遺構と捉える。

本調査地は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などの幅広い時代の遺物が確認された。人工的な灌漑水路と考えられる第1号・第2号溝状遺構からは遺物の出土はなく、時期は不明だが、隣接する内橋カラヤ遺跡第3地点で弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての掘立柱建物で構成される集落域が発見されている。そのため、内橋カラヤ遺跡第2地点B区で検出した溝も集落域と同じ時期に該当すると考える。

第3号溝状遺構は須恵器の出土が見られないため、古墳時代中頃まで、あるいは前半には埋没したと考えられる。

■ おわりに

内橋カラヤ遺跡第2地点は、試掘調査の結果、削平による遺構の未確認範囲が広範囲に及んでいた

ため、本調査の対象地をA区とB区に分けて調査を実施した。

A区では弥生時代終末期の墓域の広がりを確認できた。

B区では5条の溝状遺構を検出し、自然流路と人工的な灌漑水路を検出した。

A区、B区ともに弥生時代終末から古墳時代への過渡期の遺跡と考えられる。周辺の遺跡の状況を勘案すると、内橋カラヤ遺跡第2地点B区で検出した自然流路である第3号溝状遺構は、戸原鹿田遺跡へと続くと考えられ、当時の水利体制の一端を垣間見ることができた。また、第3号溝状遺構は内橋カラヤ遺跡第1地点、内橋カラヤ遺跡第2地点A区で検出した墓域と内橋カラヤ遺跡第3地点で見つかった集落域を区画する役割も想定される。しかしながら、A区とB区の間は遺構は削平により消失してしまっており、想定域を出ない。

本調査地周辺では、内橋鏡遺跡で弥生時代中期の甕棺墓が、内橋登り上り遺跡で弥生時代後期の墓域、内橋カラヤ遺跡で弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての墓域や集落域が確認されており、時代的なつながりを知ることができる。その後、古代においては、夷守駅家の可能性が高い内橋坪見遺跡が見つかっており、本調査地周辺は歴史的に連綿と重要な地域であったと考えられる。

内橋カラヤ遺跡第3地点



内橋カラヤ遺跡第3地点全景(北から)

内橋カラヤ遺跡第3地点

本遺跡は、弥生時代終末期から古墳時代中期の遺跡である。出土遺物に古式土師器が多く、須恵器が出土していないことは注目されることである。本調査地に隣接する内橋カラヤ遺跡第1地点では、前期前方後円墳である内橋カラヤ古墳が発見されており、本遺跡との関連性がうかがえる。

遺跡の概要

調査では、掘立柱建物3棟、溝2条の他、複数のピットを検出した。第1号溝は遺物が出土しているが、その他の遺構からは出土遺物が少なく、時期比定が難しい。出土遺物には古式土師器が多く、須恵器が出土していない。地山面付近の包含層からは黒曜石製の石鏝が出土している。

掘立柱建物

調査では3棟の掘立柱建物を検出した。いずれも東西棟で、第1号、第2号掘立柱建物は同じ主軸方向をとり、第3号掘立柱建物はわずかに西偏した主軸方向である。検出した3棟とも、出土遺物が少なく、建物同士の前後関係は判別し難い。また、建物を構成する梁行中央の柱穴がない点は注目される。

第1号掘立柱建物 [SB-1] (図3)

調査区南東に位置する東西棟の建物で、第2号掘立柱建物と重複する。5基の柱穴を検出し、柱穴の平面形は径が48～55cmの円形で、深さ17～32cmを測る。

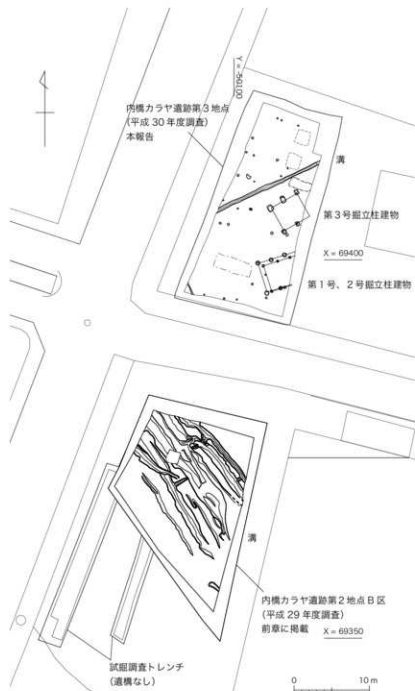


図1 内橋カラヤ遺跡周辺図(1/500)

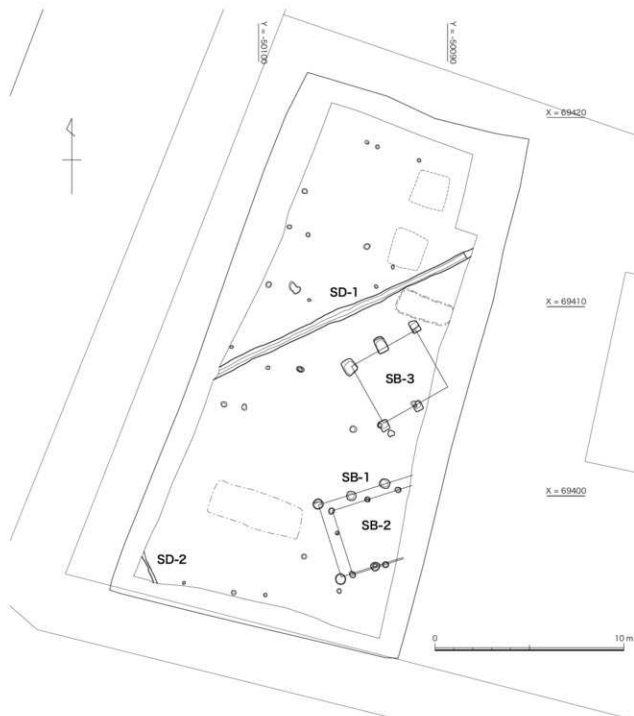


図2 内構カラヤ遺跡第3地点平面図(1/200)

梁行4.0m、桁行3.7m以上で、建物の主軸の方位はN-72.5°-Eである。柱痕は確認できなかった。

第1号掘立柱建物出土遺物(図4)

1、2は高杯の口縁部で、1は

残高1.3cm、胎土は密で細かく、砂粒などは含まない。焼成はあまく、浅黄橙色を呈する。摩滅が著しく、調整は判断がつかない。2は残高2.7cm、口径は20cmを超えと思われる。胎土は緻密で砂粒は含まない。焼成は良好で、内面は橙色、外面はにぶい橙色を呈

する。精良品で内外面ともに斜位のハケメ後、ミガキで仕上げる。1は口縁部断面形を四角に調整するのに対し、2はやや尖り気味に丸く調整する。3は壺の胴部片で、残高4.5cm、最大器厚9mmを測る。胎土は若干粗く、1~2mmの砂粒を含む。焼成は良好で内面は黄灰

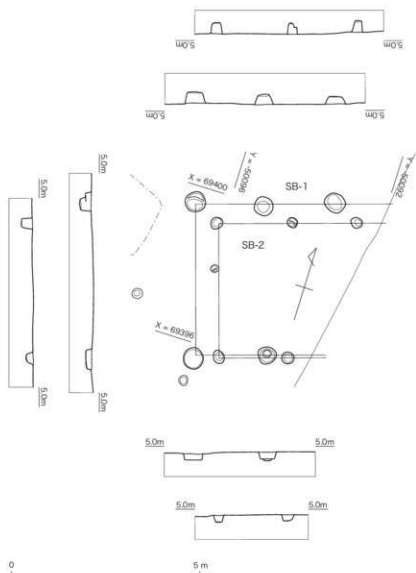


図3 SB-1、SB-2平面図、断面図 (1/100)

色、外面は橙色を呈する。調整は粗く、内面は縦方向の4条のハケメ、外面は平行タキが残る。4は壺の肩部片で、器厚は8.1mmを測る。胎土は密で1～3mmの砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。内面には6条のハケメが明瞭で、外面には肩部にハケメを施す。

第2号掘立柱建物 [SB-2] (図3)

調査区南東に位置する東西棟の建物で、第1号掘立柱建物と重複し、5基の柱穴を検出した。出土

遺物が少なく、第1号掘立柱建物との前後関係は不明だが、建て替えがおこなわれたものである。柱穴の平面形は径が28～35cmの円形で、深さ18～32cmを測る。梁行3.5m、桁行3.7m以上で、建物の主軸方位はN-72.4°-Eである。柱痕は確認できなかった。

第2号掘立柱建物出土遺物 (図5)

1は布留系甕の口縁部から肩部にかけての破片で、復元口径12.1cm、復元頭部径9.0cm、最大器厚5mmを測る。胎土は密である

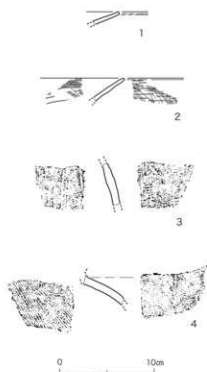


図4 SB-1出土遺物実測図 (1/4)



図5 SB-2出土遺物実測図 (1/4)

が、1～3mmの砂粒を多く含む。焼成は良好で内面は黒褐色、外面はぶい黄橙色を呈する。口縁端部を内側に折り曲げ、摘み上げる。口縁部は内外ともにナデ調整。内面の頸部直下はヨコナデし、体部はヘラケズリ。外面体部は摩滅しており、不明である。

第3号掘立柱建物 [SB-3] (図6)

調査区東寄りに位置する東西棟の建物で、5基の柱穴を検出した。柱穴の平面形は方形で、長軸51～86cm、短軸22～35cm、深さ

48～57cmを測る。梁行3.45m、桁行3.9m。建物の主軸方位はN-60.6°-Eである。平面形が方形であること以外、掘方の大きさにバラつきがみられる。柱痕は確認できなかった。また、第3号掘立柱建物の北東、北側柱穴列の延長上に試掘調査トレンチがあり、その箇所では柱穴を検出していないため、建物規模は桁行2間、梁行1間である。

第3号掘立柱建物出土遺物(図6)

1は壺の頸部から肩部にかけての破片で、最大器厚は9mmを測る。厚手で在地系の壺であろうか。胎土は1～3mmの砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は橙色、外面は橙色と褐灰色を呈する。調整は内

面の肩部付近まで左上りのケズリを施し、外面は頸部からタテハケを施す。

溝

調査区では2条の溝を検出した。そのうち、第1号溝が東西溝で深さ34～41cmを測るのに対し、第2号溝は南北溝で深さは数cmしか検出できなかった。遺構上面は大きく削平されていると考えられる。この2条の方向はほぼ直交し、調査区外で交わる可能性があるが、今回の調査では確認することが出来なかった。

第1号溝 [SD-1] (図8)

調査区の中央を北東から南西に向かって流れ、N-64.2°-Eの方位をとる東西溝である。幅50cm、深さは北東端で34cm、南西端で41cmを測る。東西ともに調査区外へ伸び、検出した長さは約14.8mでほぼ直線である。断面は台形状であり、埋土は上下2層に分かれる。

第1号溝出土遺物(図9)

遺物は他の遺構に比べ出土しているが、小片が多く図示できるものは少ない。第1号溝の埋土は上下2層に分けられ、大半は上層からの出土で、下層からの出土は5、7、8、9、11のみである。

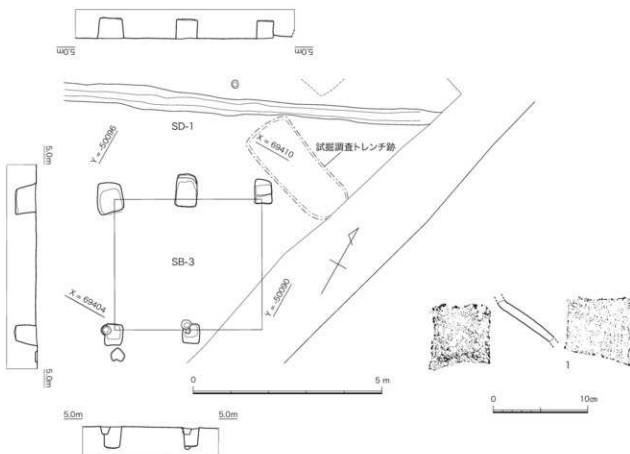
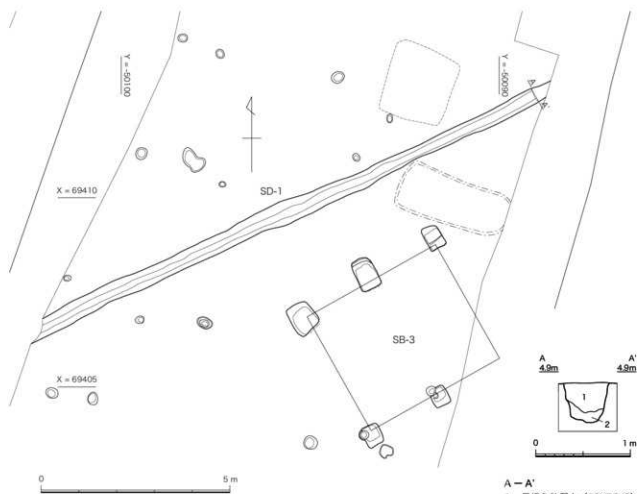


図6 SB-3平面図、断面図(1/100)、出土遺物実測図(1/4)



A-A'
 1. 黒褐色粘質土 (10YR2/2)
 2. 褐色粘質土 (10YR4/4)
 地山 褐色粘質土 (10YR4/6)

図8 SD-1平面図 (1/100)、土層断面図 (1/20)

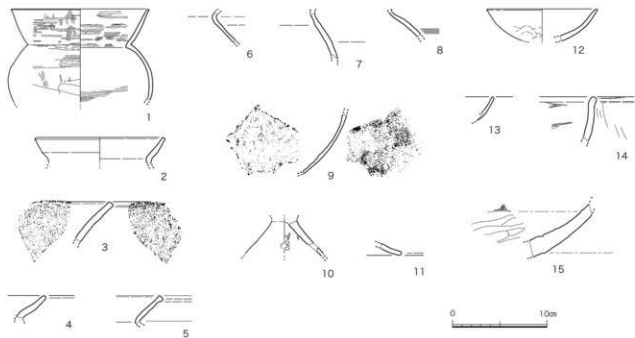


図9 SD-1出土遺物実測図 (1/4)

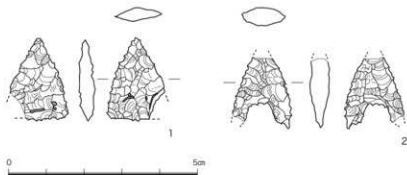


図10 石器実測図(1/1)

1は精製の小型丸底壺で底部を欠損する。口径14.4cm、頸部径10.9cm、残高9.9cmを測る。胎土は密で、1～2mmの砂粒を含む。焼成は良好で、内面はにぶい黄橙色や浅黄橙色、外面はにぶい黄橙色や橙色を呈す。口縁部は内面にヨコハケを施した後、横位のヘラミガキ、体部内面の上半はナデ調整し、下部に左上りのヨコハケを施す。外面は下部をヘラケズリ、残りにタテハケを施した後、口縁部に肩部にかけて横位のヘラミガキを施す。

2～9は甕。2、3、4、5は甕の口縁部。2は口縁部から頸部にかけての破片で、復元口径13.2cm、復元頸部径10.9cm、残高2.65cmを測る。胎土は密で、1mm前後の砂粒を含む。焼成は良好で、内面はにぶい黄橙色、外面は橙色を呈する。内外面ともにナデ調整する。口縁部は頸部からわずかに内湾しながら立ち上がり、端部をわずかに上方へ積み上げる。3は残高4.2cmを測る。胎土は粗雑で、1～2mmの砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は淡橙色、外面は橙色、断面は黄灰色を呈す。内面はヨコナデ、外面は斜位のハケメを施す。口縁は緩やかに外反し、端部は平坦となる。4は残高2.35cm、最大器厚は6.8mmを測る。胎

土はやや密で、1～3mmの砂粒を含む。焼成はやや不良で、少し脆く、軽い。内面は浅黄橙色、外面は黄橙色を呈する。口縁部は緩やかに外反しながら開き、わずかに内湾する。5は残高2.9cm、胎土はやや粗く、1～2mmの砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面ともに灰黄褐色を呈し、ナデ調整を施す。端部は外方へ拡張する。6～8は甕の頸部から肩部。6は残高3.1cm、頸部の器厚は4.8mmを測る。焼成は良く、内面は浅黄橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。頸部の内面をヨコナデ、体部内面をヘラケズリし、外面の肩部にはハケメを施す。7は肩部で、残高4.8cm、最大器厚6.5cmを測る。胎土はやや粗く、1～2mmの砂粒が多く、4mmほどの小石も含む。焼成は良好、内面は灰黄褐色、外面はにぶい黄橙色を呈する。頸部内面に指オサエによる浅い凹みが見られ、体部はヘラケズリする。外面は肩部にタテハケ、体部にヨコハケを施し、ともにナデ消す。8は残高2.5cm、最大器厚4.8mmを測る。胎土はやや粗く、1～2mmの砂粒を多く含む。焼成は良く、内面は浅黄橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。体部内面にヘラケズリ、外面にヨコハケを施す。9は甕の胴部片で、残高6.25cm、

最大器厚4.0mmを測る。胎土はやや密で、1～3mmの砂粒を多く含む。焼成は良好で内面は橙色や灰黄褐色、外面は橙色や黒褐色を呈す。器厚が非常に薄く、内面は左上りのヘラケズリで指オサエの痕が残る。外面は体部中位にヨコハケを施し、全体を細かいタテハケで調整する。

10は器台の脚部。復元頸部径2.7cm、残高3.2cmを測る。胎土は密で、わずかに1mm前後の砂粒を含み、4mmほどの小石も含む。焼成は良く、赤橙色を呈す。脚部にはかろうじて円孔の一部が残る。外面は摩滅しており調整は不明、内面はヨコハケが残る。11は高杯の脚部。残高1.3cm、器厚4.5mmを測る。胎土は密で砂粒を含まず、焼成は良い。明赤褐色を呈す。摩滅が著しいが精製品と思われる、外面には横位のミガキ痕が確認でき、内面はナデ調整する。

12～15は鉢。12、13は直口鉢。12は復元口径11.6cm、残高3.25cmを測る。胎土は密で1～2mmの砂粒を含む。焼成は良好で、内面はにぶい橙色、外面は橙色を呈す。摩滅が著しいが、内面は全体にミガキが施され、外面は底部をケズリ、口縁部から下数cmまでミガキを施す。13は残高2.5cm、器厚3.5mmを測る。胎土はやや密で、微細な砂粒を含む。焼成は良く、軽い。明赤褐色を呈し、口縁端部を丸くおさめる。端部にミガキ痕が残るが、ほかは不明。14は半球形となる鉢の口縁部で残高4.7cm、器厚7.0mmを測る。胎土は粗く、少々脆い。2～4mmの砂粒を多く含む。焼成は良く、にぶい黄橙色を呈する。体部はわずかに開きながら立ち上がり、口縁部で軽く内湾した後、端部を外方へ積み出す。内面は横位のケズ

り、外面は縦位のケズリを施す。**15**は粗製鉢の底部。残高5.5cm、最大器厚1.8cmを測る。胎土は粗く、1～3mmの砂粒を多く含む。焼成は良く、堅緻である。内面は黄灰色、外面は橙色、底部は黒色を呈す。内面底部を不定方向から粗くヘラケズリし、体部はタテハケを施す。外面はナデ調整し、底部に横位のヘラケズリを施す。

第2号溝(図2)

調査区南東の角で検出し、N-24°-Wの方位をとる南北溝である。幅18～20cm、深さ約5.0cmと浅く、流れる方向などは不明である。また、出土遺物が少なく、小片ばかりのため、図示し得ない。

石器(図10)

1、**2**は黒曜石製の石鎌。**1**は第1号溝の1層から出土し、基部の一部を欠損する。長軸2.15cm、原寸幅1.5cm、最大厚4mmを測る。**2**は調査地南東の地山面に表採した。先端と基部を欠損する。原寸長軸1.85cm、原寸幅1.6cm、最大厚4.8mmを測る。**1**は漆黒で、若干粗い調整である。**2**は透明度が高く、丁寧に仕上げる。どちらも縄文時代のもので、**2**の方が若

く古いと思われる。周辺に所在する遺跡からの流れ込みと想定する。

おわりに

調査成果として、検出した遺構は掘立柱建物3棟、溝2条、その他複数のピットである。遺構の検出面は造成土の直下にあり、造成時に削平を受けているものと考えられる。検出した第1号溝は東西方向に調査地を貫流し、第2号溝は調査地南西隅を南北に貫流する。どちらもほぼ直線で、調査地外西側で直交する可能性がある。

掘立柱建物については、第1号・第2号掘立柱建物の2棟と第3号掘立柱建物ではわずかに建物主軸方位が異なるが、いずれも第1号溝と概ね並行している。第1号・第2号掘立柱建物は調査地外へ伸びているため全体を把握することはできなかったが、第3号掘立柱建物は桁行2間、梁行1間の建物規模であることが分かっている。3棟の掘立柱建物は出土遺物が少なく、建物同士の前後関係を把握するに至らなかったが、第1号溝を含め、同じ時代の遺構であると推察される。また、第1号掘立柱建物と第2号掘立柱建物は南側柱筋が同じ位置にあること、建物の主軸方位が同じであることな

どから、建て替えと判断できる。第3号掘立柱建物については、第1号・第2号掘立柱建物と柱穴の平面形や深さ、建物の主軸方位の違いなどから、時期が前後する可能性がある。

出土遺物については、古式土師器が多く出土する一方で、須恵器が出土していないことは注目される。器種は壺、甕、鉢、高杯、器台があり、外系土器と在系土器が混在する。出土遺物から、調査地は弥生時代終末期から古墳時代初頭に比定され、須恵器使用以前の集落と想定される。

調査地が所在する低丘陵地は乙大丘陵から派生し、東西に伸びる。調査地はその北側に位置し、調査地から北に500mで多々良川へ達する。この低丘陵地が多々良川流域では、弥生時代から青銅器生産が知られ、古墳時代前期には前方後円墳である戸原王塚古墳や内橋カラヤ古墳が築造されなど、当時の拠点地域であったことが明らかになりつつある。本遺跡は、このような拠点地域内に位置する集落跡であり、須恵器使用以前の生活を垣間見ることができた。しかしながら、遺跡の一部を調査したに過ぎず、遺跡の全容、周辺遺跡との関連など、不明な点が多く残った。今後の調査によって、明らかになることを期待したい。

内橋鏡遺跡3次



内橋鏡遺跡3次全景（北から）

内橋鏡遺跡3次

隣接する1次、2次調査でみられた土坑、ピット群等の広がりを確認した。7世紀～8世紀を中心とした遺構・遺物を検出しており、なかでも、度量衡に関わる「榿」の出土は、官衙の存在を示すもので、近接する内橋坪見遺跡（実守駅家か）との関連が想定される。また、新羅土器の出土もあり、朝鮮半島文化の流入も指摘できる遺跡である。

遺跡の概要

調査地は、東西に伸びる舌状丘陵の頂部に位置している。1次調査地と2次調査地に隣接する203㎡の範囲が本報告の3次調査地である。

1次調査、2次調査でみられた弥生時代中期の墓群は認められないが、古墳時代から古代の土坑、ピット等が分布する。調査区の南側には、遺跡廃絶後に遺物包含層が堆積しており、包含層の上面で検出した遺構はない。包含層は7世紀～8世紀中ごろまでの遺物を含む。

主な遺構は、不定形の土坑が大半を占め、その用途は廃棄土坑とみられる。ピットのなかには、規模・形状からみて柱穴と判断できるものもあり、組み合わせはみつからなかったが、掘立柱建物がさらに存在する可能性が高い。

注目すべき遺物に、新羅土器がある。隣接地の内橋袖ノ木遺跡第2地点（近年に報告書刊行予定）で、朝鮮半島系の遺物である有溝把手が複数出土していることもあり、渡来人の存在が想定される。また、度量衡に関わる滑石製の榿は、約200m東に位置する内橋坪見遺跡（実守駅家か）との関係が考えられる。そのほかに、赤焼土器の割合が高いことも特徴的である。



図1 内橋鏡遺跡周辺図(1/1,000)

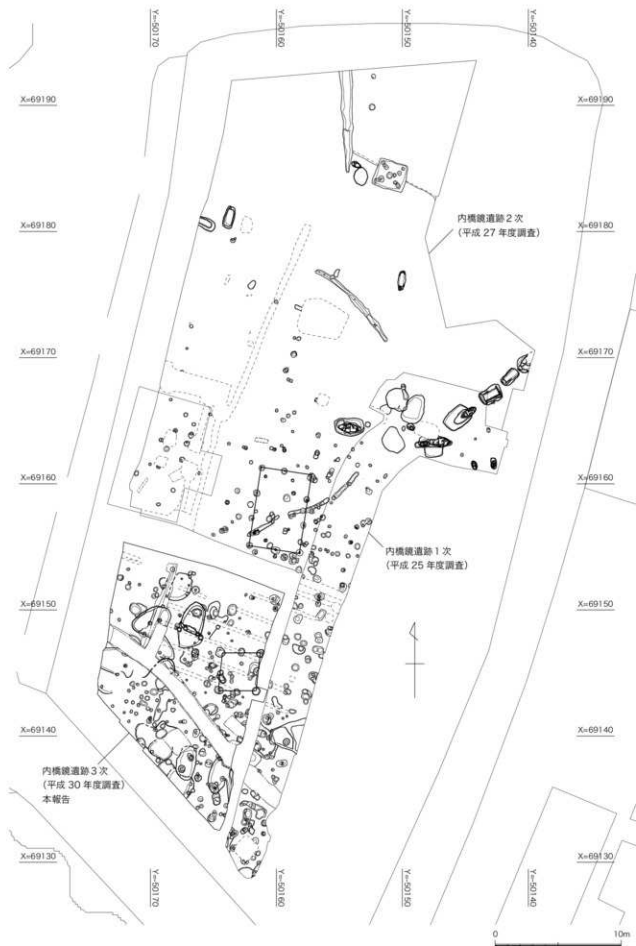


図2 内橋縄道跡遺構全体図(1/300)



図3 内橋通遺跡3次平面図(1/100)

掘立柱建物

第1号掘立柱建物【SB-1】(図4)

調査区の東端に位置し、包含層の下層より検出した。梁行、桁行ともに2間の掘立柱建物で、建物主軸方位は6.3°東偏する。柱筋の通りが悪いため、梁行、桁行とも3m程度と想定するに留めておく。柱掘方の平面形は径40cm～70cmの円形で、深さは30cm～60cmである。

第1号掘立柱建物出土遺物(図5)

1は須恵器の平瓶の口縁部。推定口径5.8cm。口縁部の下位と肩部にカキメを施す。7世紀代か。
2～4は柱穴を切るビット出土。
2は須恵器の高台付杯身。高台径6.7cmで、細い高台が外方向に踏ん張る。牛頸編年VI期で7世紀後半。
3は弥生土器の甕の口縁部。
4は埴輪片で、外面はタテハケで一部ヨコハケを施す。内面はナデ。周辺地の遺跡からも埴輪片が出土しており、近隣に未発見の埋没古墳が存在する可能性がある。

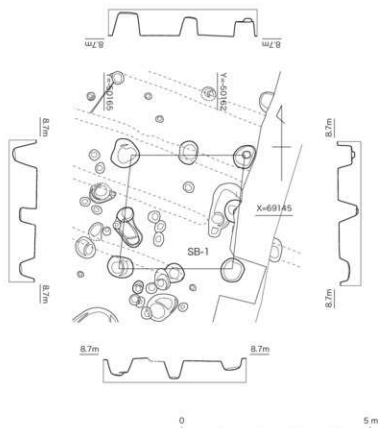


図4 SB-1 平面図、断面図 (1/100)

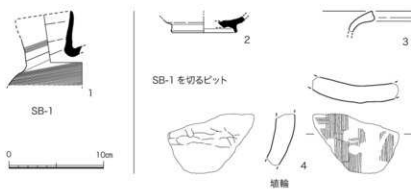


図5 SB-1 関連遺物実測図 (1/4)

土坑

15基の土坑を検出した。遺構の平面は、楕円形～崩れた隅丸三角形で、断面は皿状を呈する。おそらく廃棄土坑とみられ、同じ場所でも複数の土坑が重複する例が多い。掘立柱建物と避ける等、空間地利用が制限されていたのではなかろうか。1次調査区の南側(3次SB-1の南東側)においても、不定形の掘り込みを2基確認してい

る。当時は、調査範囲が狭小で全体像が把握できていなかったため、「土器溜まり」として報告したが、今回の調査成果によって、これらも一連の土坑と判断する。

第1号土坑【SK-1】(図6)

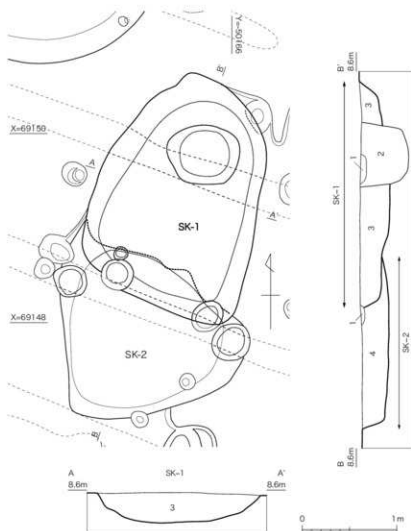
調査区中央付近に位置し、

SK-2を切る。不定形な隅丸方形を呈し、長軸2.42m、短軸1.73m、深さ0.32mを測る。検出時ではSK-2と区別できていなかったため、検出面で取り上げた遺物は二つの遺構のものが混在した状態になってしまった。

第1号土坑関連遺物 (図7)

1、2ともに掘方基底部付近で出土。1は須恵器の杯蓋で、復元口径12.2cm。口縁部を丸くおさめ、口縁部は直立する。内外面ともヨコナデ。牛頭編年IV B期。
2はかえりを持つ須恵器の杯蓋で、復元口径10.0cm。器面荒れのため調整不明。牛頭編年V期。

3～7は、SK-1、2の検出面出土。3、4は須恵器杯身の口縁部。いずれも内外面ヨコナデ。5は須恵器杯身で内外面ヨコナデ。牛頭編年VI期。6は須恵器の高台付壺の高台。復元高台径9.6cmで、端部を内側に折り曲げるように横み出す。内外面ヨコナデ。7は内黒土器で、器壁はやや厚く、体部下方で屈曲し、口縁部は緩く外反する。内面中央部のみ横位のヘラミガキで、他は斜位のヘラミガキを施す。復元口径15.6cm。



第2号土坑 [SK-2] (図6)

SK-1に切れられ、不定形な隅丸方形を呈する。長軸2.15m以上、短軸1.9m、深さ0.28mを測る。

1. 暗灰色微砂 (旧畑の畝溝)
2. 暗褐色土に橙褐色土ブロックを含む
3. 褐色土に橙褐色土ブロックを含む
4. 3と近似し、3よりも明度があり、明赤褐色土ブロックを含む

図6 SK-1、2 平面図、断面図 (1/40)

第2号土坑関連遺物 (図7)

8は須恵器杯蓋で、口縁部は直立する。9は須恵器杯身。いずれも牛頭編年IV期。10～12はSK-2を切るビット出土で、いずれも8世紀以降。10は須恵器の甕の口縁部。端部を肥厚させて方形形状を呈する。11は須恵器の杯身で、口縁部がやや外反する。12は須恵器の高杯。

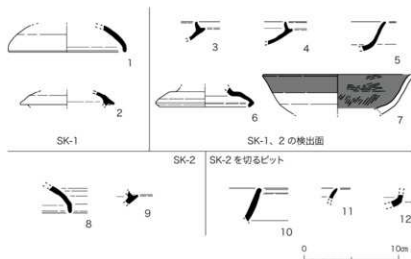


図7 SK-1、2 関連遺物実測図 (1/4)

第3号土坑 [SK-3] (図8)

調査区南端に位置し、SK-12を

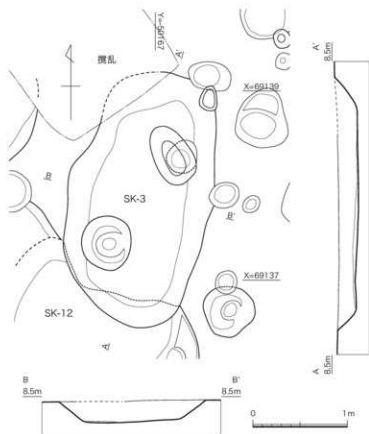


図8 SK-3平面図(1/40)

切る。楕円形を呈し、長軸2.67m、短軸1.55m、深さ0.23mを測る。

第3号土坑関連遺物(図9)

1は須恵器杯蓋で、牛頭編年VI期。2、3は須恵器杯身。3は底部へら切り後ナデで、へら記号がある。底径5.0cm。4は滑石製の紡錘車で、直径4.2cm、孔径0.6cmを測る。

5、6はSK-3に切られるピット出土。5は須恵器の脚部で、端部は凹線状にくぼむ。6は須恵器の壺で、胴部最大径13.0cm。

7~10はSK-3を切るピット出土。7は土師器杯身で、底径6.0cm。器面が荒れているため調整不明。8は土師器の高台付杯身。高台は高く、外側へ張り出す。体部は直線的に開く。底部外面はへら

切り後ナデで、へら記号をもつ。9は平瓦で、凸面は縄目タタキ。10は移動式電の左側底部。

第4号土坑[SK-4](図10)

SK-3の東に位置し、楕円形を呈する。溝と重複するが前後関係は判断できなかった。北側を攪乱で消失する。長軸2.8m以上、短軸1.37m、深さ0.22mを測る。

第4号土坑出土遺物(図11、12)

1~10は須恵器で、牛頭編年のIVB期~VI期の範疇。1はかえりをもたない杯蓋で、天井部はへら切り後ナデ。復元口径10.6cm、器高2.7cm。天井部外面にへら記号をもつ。2、3はかえりをもつ杯蓋で、いずれも天井部はへ

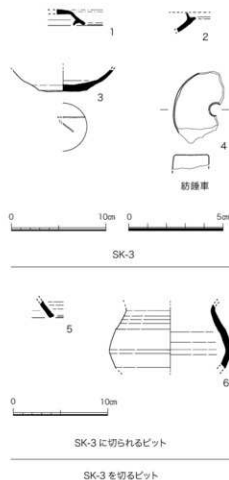


図9 SK-3関連遺物実測図(1/4、石製品1/2)

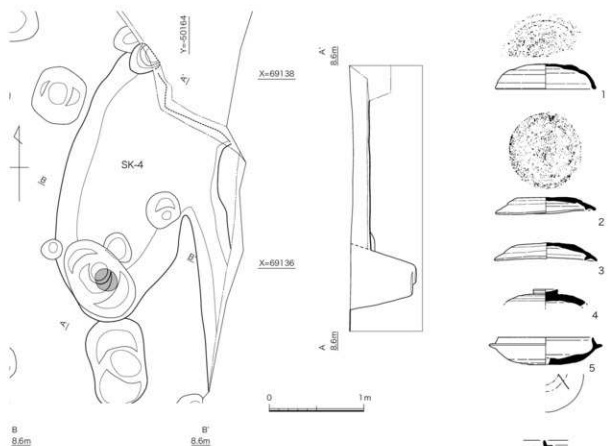


圖10 SK-4平面圖(1/40)

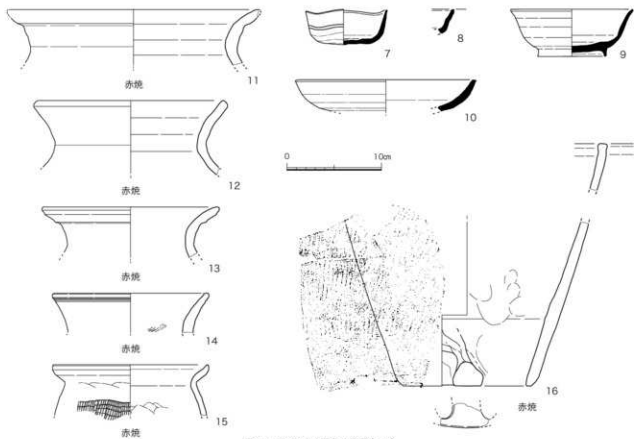


圖11 SK-4出土遺物実測図(1/4)

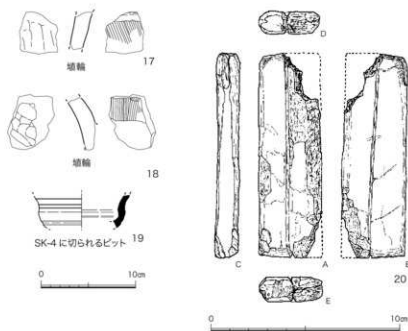


図12 SK-4出土遺物実測図(1/4、石器1/2)

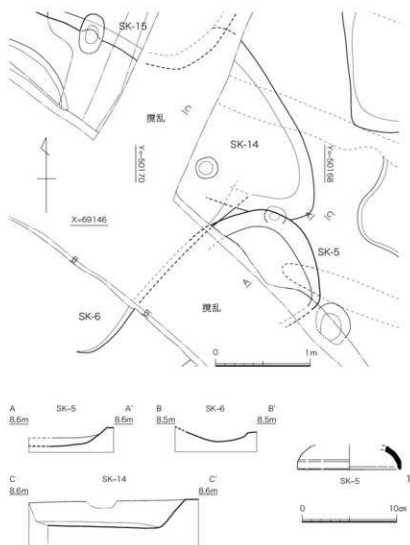


図13 SK-5、6、14平面図、断面図(1/40)、SK-5出土遺物実測図(1/4)

ラ切り後ナデ。2は口径10.2cm、器高1.8cm。天井部にヘラ記号をもつ。3は口径10.4cm、器高1.7cm。4は摘みをもつ杯蓋で、天井部は回転ヘラケズリ。摘み径2.4cm。5、6はかえりをもつ杯身で、いずれも外面にヘラ記号がある。5の底部はヘラ切り後ナデ。復元口径10.0cm、器高2.9cm、復元受け部径12.0cm。7は焼で焼け歪みがある。体部に2条の沈線を施し、底部は回転ヘラケズリ。8は杯の体部。9は高台付杯身。高台は細く、わずかに外方に踏ん張る。底部は回転ヘラケズリを施し、体部との境は丸みをもつ。口縁部はやや外反する。復元口径13.0cm、器高5.0cm、高台径7.3cm。10は皿で、体部中位まで回転ヘラケズリを施す。復元口径19.2cm。

11～15は赤焼土器の甕。11は大型で口縁部が肥厚する。復元口径26.8cm、色調は橙色。12は復元口径19.6cm、色調は橙褐色。13は口縁部が肥厚し、復元口径18.5cm、色調は橙色。14は口縁部外面に2条の沈線を施す。頸部の器壁は厚い。復元口径16.0cm、色調はにぶい赤褐色。15は口縁端部を上方に摘み出す。体部外面はタタキで、内面はナデ。復元口径16.4cm、色調は褐色。16は赤焼土器の甕。外面は縦位の平行タタキで、底部はカキメを施す。内面は底部がヘラケズリで、体部はナデ。復元底径12.6cm。同一個体とみられる口縁部があり、外面は口縁直下まで縦位の平行タタキを施し、それ以外はナデ。色調は橙色。

17、18は埴輪。17は外面に斜位のハケメを施し、内面はナデ。上部はタガの剥離痕。18は朝顔型埴輪か。外面はタテハケを施し、内面はエビオサエ。下部はタガの

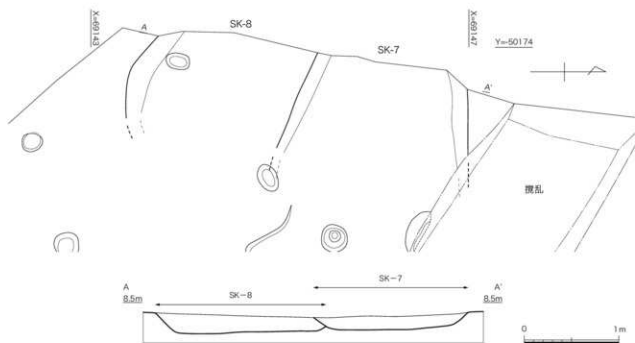


図14 SK-7,8平面図、断面図(1/40)

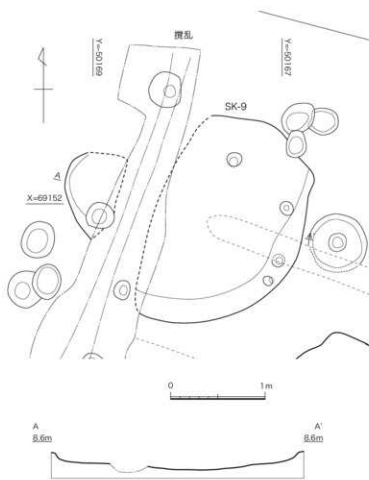


図16 SK-9平面図、断面図(1/40)

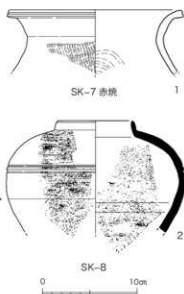


図15 SK-7,8出土遺物実測図(1/4)

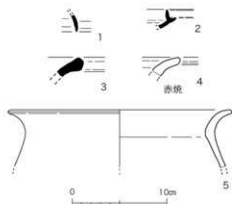
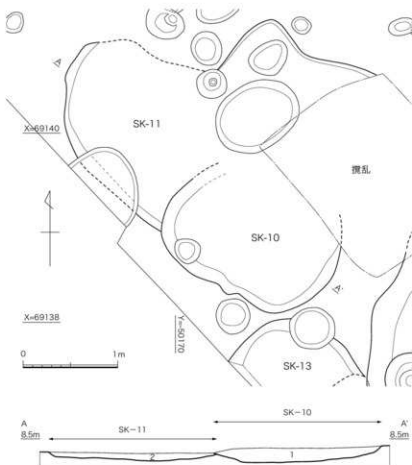


図17 SK-9出土遺物実測図(1/4)

剥離痕とみられる。

19は須恵器の壺か。SK-4に切られるピット出土。胴部外面に凹線状の段が付く。頸部は強いヨコナデにより、隆起状を呈する。焼成はやや甘く軟質気味である。

20は頁岩製の片刃石斧未製品で、擦切技法による未分割の段階である。擦切線は、表裏の両面と両木口に認められる。完成時の基部と刃部を意識して、若干斜め方向に擦切線が入れられており、刃部は基部より多少幅広になる。A面は片理に直交する研磨痕がみられる。平坦面を整える程度の研磨で、上半部は自然面が多く残る。B面は風化のためか研磨痕はみられない。自然平坦面の可能性もある。C面とD面は研磨によって平滑面を仕上げられる。



1. にじい褐色土(7.5YR5/3) 2. 灰褐色土(7.5YR4/2)

図18 SK-10、11平面図、断面図(1/40)

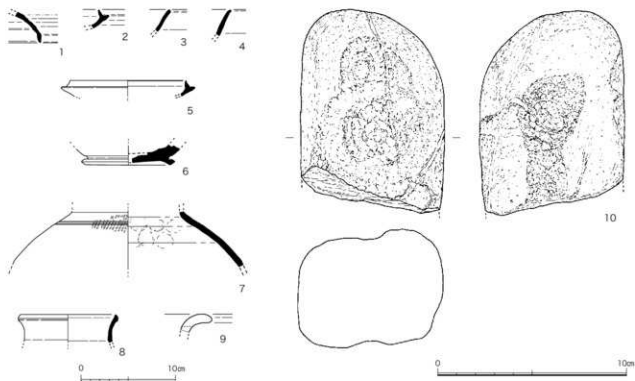


図19 SK-10出土遺物実測図(1/4、石器1/2)

第5号土坑 [SK-5] (図 13)

調査区中央に位置し、SK-14を切る。SK-6ともわずかに重複しているが、前後関係ははっきりしない。掘方の大半を擾乱によって消失しており、確認できる範囲では、北西-南東方向1.4 m、北東-南西方向0.6 m、深さ0.19 mである。

第5号土坑出土遺物 (図 13)

1は須恵器杯蓋で、体部は丸味をもつ。復元口径10.7 cm。牛頭編年V期か。

第6号土坑 [SK-6] (図 13)

SK-7の東側に位置し、掘方のほとんどを擾乱と削平で消失している。擾乱を跨いで、SK-5とSK-14に重複する掘り込みを一連の掘方と判断し、長軸2.3 m以上の土坑とするものである。深さは0.14 mしか残っていない。出土

遺物はない。

第7号土坑 [SK-7] (図 14)

調査区西端に位置し、SK-8を切る。東側は削平によって掘方を消失している。南北長2 m、東西長1.16 m以上、深さ0.18 mを測る。

第7号土坑出土遺物 (図 15)

1は赤焼土器の甕で、体部外面に斜位の平行タタキを施し、内面には同心円文当て具痕が残る。口縁部は内外面ともナデ。色調は赤褐色で、焼成良好である。復元口径18.2 cm。

第8号土坑 [SK-8] (図 14)

調査区西端に位置し、SK-7に切られる。SK-7と同様に東側の掘方を削平で失う。南北長1.9 m以上、東西長1.1 m以上、深さ0.22 mを測る。

第8号土坑出土遺物 (図 15)

2は須恵器の短頸甕で、体部に2条の沈線が周る。体部下半の外面にタタキを施し、内面には平行当て具痕が残る。体部の外面はカキメを施すが、胴部最大径部の下方の一部にカキメが周らない箇所があり、そこにカキメと異なる原体で薄く1条の区分線が引かれている(図中の▶)。口縁部と体部内面はヨコナデ。復元口径8 cm。復元胴部最大径18.9 cm。

第9号土坑 [SK-9] (図 16)

調査区の北に位置する不定形の土坑で、掘方の西側を擾乱で一部失う。南北長2.27 m以上、東西長2.6 m、深さ0.22 mを測る。

第9号土坑出土遺物 (図 17)

1~3は須恵器。1は杯蓋で、口縁部内面に沈線上の段をもつ。2は杯身。3は甕の口縁部。4は

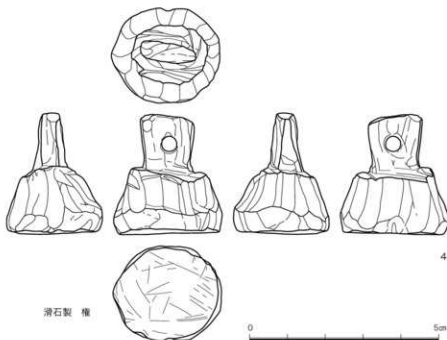
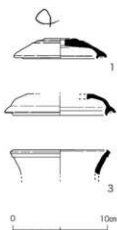


図 20 SK-11 出土遺物実測図 (1/4、石製品 1/1)

赤焼土器の口縁部で、色調は橙色。
5は土師器の甕で、体部内面はヘ
ラケズリを施す。復元口径23.7cm。

第10号土坑 [SK-10] (図18)

調査区の南端に位置し、SK-11
を切る楕円形の土坑で、北東側は
攪乱と削平で掘方を失う。南北長
1.0 m以上、東西長1.9 m、深さ
0.22 mを測る。

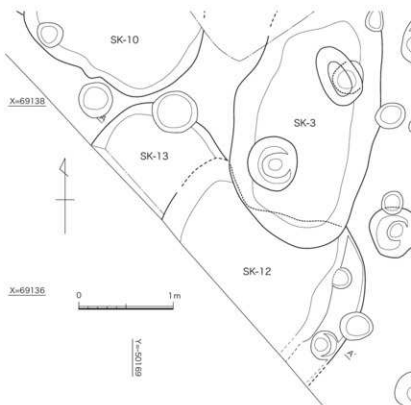
第10号土坑出土遺物 (図19)

1～8は須恵器。1は杯蓋で、
口縁端部は直立し、体部は丸味を
もつ。天井部は回転ヘラケズリを
施す。2～5は杯身の口縁部。5
は復元口径12.2cm。6は高台付
長頸壺で、高台は短い外方向
に強く張り出す。復元高台径9.9
cm。7は直口壺の肩部で、頸部下
方に2条の沈線がある。外面に細
い平行タタキを施した後、丁寧な
ヨコナデで消している。内面に当
て具痕の輪郭がわずかに残るが、
ヨコナデによって不明瞭になって
いる。復元頸部径11.8cm。8は
甕の口縁部。9は土師器甕の口縁
部。10は花崗岩製のくぼみ石で、
下半は欠損する。両面にくぼみ
があり、片面は2箇所に認めらる。
全体的に赤色に変色しており、2
次的に被熱している可能性がある。

古相の遺物も混入するが、遺構
は牛額編年VI期の所産である。

第11号土坑 [SK-11] (図18)

SK-10に切られる不定形の土坑
で、削平と攪乱によって掘方の一
部を失う。南北長2.2 m以上、東
西長3.3 m以上、深さ0.14 mを
測る。



1, 1にふい掃色土 (7.5YR5/3) 2, 赤褐色土 (5YR4/6)

図21 SK-12, 13平面図、断面図 (1/40)

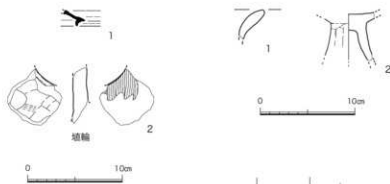


図22 SK-12出土遺物実測図 (1/4)

第11号土坑出土遺物 (図20)

1～2は須恵器杯蓋。1は天井
部ヘラ切り後未調整。復元口径
9.8cm、器高2.1cm。天井部外面
にヘラ記号をもつ。2は天井部ヘ
ラ切り後ナデか。復元口径11.8
cm、器高2.3cm。3は須恵器の甕

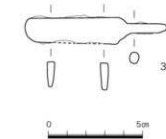


図23 SK-14出土遺物実測図 (1/4、鉄
器1/2)

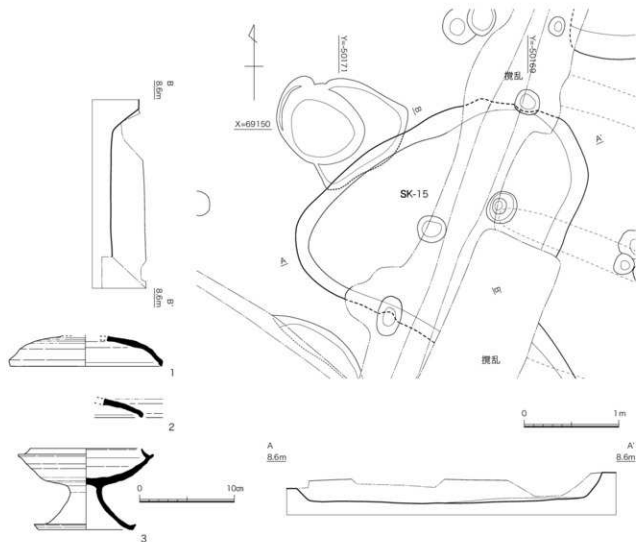


図24 SK-15平面図、断面図(1/40)、出土遺物実測図(1/4)

で、復元口径10.6cm。

4は滑石製の楕の完形品。遺構検出面から3～4cm掘り下げた段階で出土したもので、確実に遺構にともなう。扁平な鈕をもち、身体は短い円柱状を呈する。身体は、縦方向の削りを上下2段に分けておこなうことで円形に仕上げている。やや楕円になるため、長軸2.9cm、短軸2.5cmを測る。全長3.2cm、重さ21.75gである。古代の重量単位である1大兩が41.0g～43.5gとされるので、ちょうど半分(12銖)になる。形状、調整、重量などからみて、精巧に製作されたものである。共伴の須

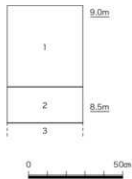
恵器は牛頭編年V期～VI期であり、包含層の下層で遺構を検出していることからみても、8世紀に降ることはない。

第12号土坑 [SK-12] (図21)

調査区の南端に位置し、SK-3に切られる楕円形の土坑である。幅2.47m、深さ0.25mを測る。

第12号土坑出土遺物 (図22)

1は須恵器杯蓋。2は埴輪で、円形透かし孔の外周はタテハケ、内面はナデである。



1. 造成土
2. 包含層 灰褐色土(7.5YR4/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/6)が少量混ざる
3. 地山

図25 調査区南端隅 包含層土層模式図(1/20)

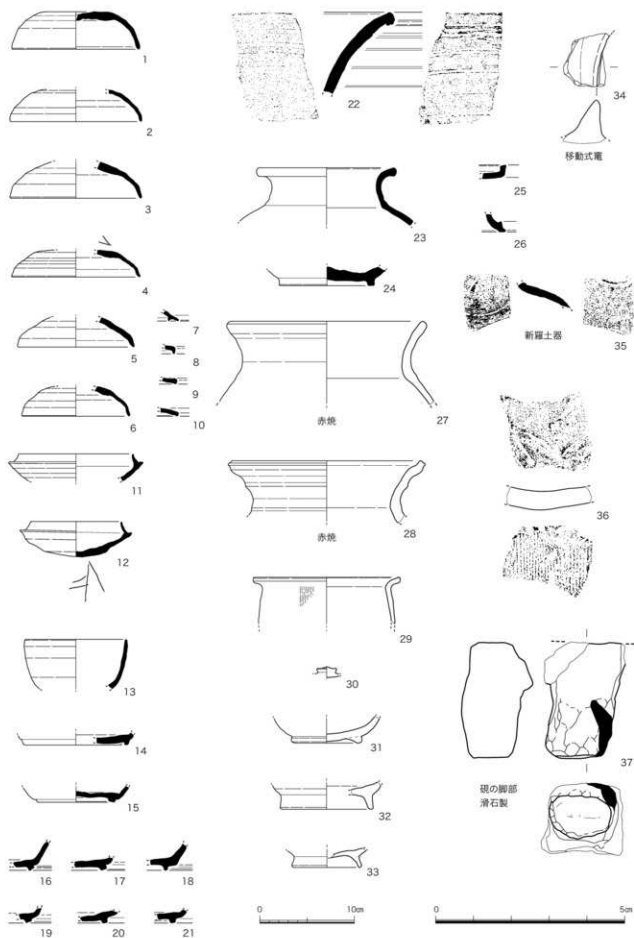


図 26 包含層出土遺物実測図 (1/4、石製品 1/1)

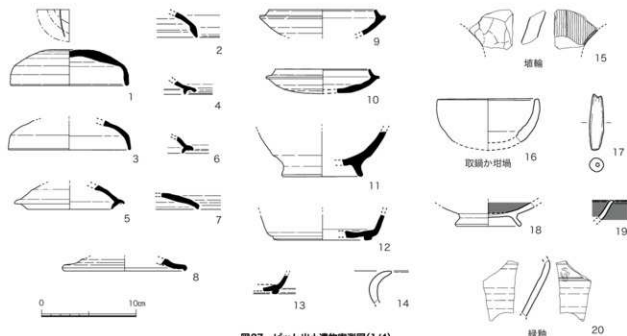


図27 ビット出土遺物実測図(17/4)

第13号土坑 [SK-13] (図21)

SK-12に切られる楕円形の土坑であるが、SK-12と土色が近似し、基底部のレベルもほぼ同じであることから、同一遺構の可能性もある。出土遺物は土師器の細片のみで図示し得ない。

第14号土坑 [SK-14] (図13)

調査区中央に位置し、SK-5に切られる不定形の土坑である。掘方の大半を掘乱で消失する。残長1.85 m、深さ0.34 mを測る。

第14号土坑出土遺物 (図23)

1は土師器甕。2は土師器の高杯。3は刀子か。全長7.5cm、幅1.4cm、厚0.4cmを測る。柄部の断面は円形に近く、刃部は刃が判然としない。

第15号土坑 [SK-15] (図24)

調査区の中央に位置する不定形

の土坑である。掘方の一部を掘乱で消失する。長軸3.25 m、短軸2.15 m以上、深さ0.37 mを測る。

第15号土坑出土遺物 (図24)

図示したものはすべて須恵器。1、2は杯蓋で、天井部に回転ヘラケズリを施し、口縁部を折り曲げる。牛頭編年VII A期。1は復元口径16.0cm、器高3.2cm。3は高杯で、口径11.6cm、受け部径14.3cm、器高8.6cm、底径10.0cm。杯部の下半に回転ヘラケズリを施す。牛頭編年IV B期。

| 包含層 (図3、25)

調査区の南側で、厚さ20cm程度の遺物包含層を確認した。包含層の上面で検出した遺構はなく、遺跡廃絶後に堆積したものである。

包含層内には、遺跡の稼働期である7世紀代の遺物が多く含まれている。包含層出土遺物のなかで

特筆すべきものとして、新羅土器がある。

包含層出土遺物 (図26)

1～26は須恵器。1～10は杯蓋である。1、2、3、5は天井部へラ切り後回転ヘラケズリで、4、6はへラ切り後ナデである。1は復元口径13.4cm、器高4.1cm、復元底径7.0cm。2は復元口径13.8cm、器高3.4cm。3は復元口径13.8cm。4は復元口径13.6cm、器高2.8cm、外面にへラ記号をもつ。5は復元口径12.4cm。6は口径11.2cm、器高3.1cm。7はかえりをもち、8は嚙状口縁。9、10は嚙状口縁が退化したもの。11～13は杯身。11は口径12.4cm、復元受け部径14.2cm。12は復元口径9.6cm、復元受け部径11.8cm。底部はへラ切り後ナデで、外面にへラ記号をもつ。13は碗で、復元口径10.8cm。14～21は杯身の高台。14は復元高台径10.6cm。15は復元高台径8.2cm。22は甕の口縁部で、

外面はタテハケ後に沈線を施す。内面はヨコハケ。23は壺で、復元口径14.8cm。24は壺の高台で、高台径10.2cm。25、26は高杯。

27、28は赤焼土器。27は復元口径20.2cm。28は復元口径20.0cm。

29は弥生土器の甕。復元口径16.0cm。

30～33は土師器の杯。30は杯蓋の摘み。31は復元高台径7.2cm。32は復元高台径9.8cm。

33は復元高台径7.0cm。34は土師器の移動式竈。

35は新羅土器の扁球形瓶の肩部とみられる。頸部の付け根に凹線文状の突帯がある。肩部外面には沈線帯を器面に巡らし、押捺文による装飾を施す。文様構成は、頸部側から半円点文-三角文-半円点文の順に、それぞれ沈線帯のなかに1状ずつ巡らす。外面には自然釉が付着する。胎土は精良で、灰赤色を呈し、白色粒、黒色粒を含む。外面の色調は暗褐色、内面は灰色～青灰色を呈する。

36は平瓦。37は滑石製の観の脚部で、上面は黒が付着している。細かい削りて円柱状に仕上げ、上面はわずかに緩やかな曲線をもつ。風字硯か。

ビット出土遺物(図27)

ビット出土遺物をまとめて報告する。1～7は須恵器の杯蓋。1は復元口径12.2cm、器高3.8cm。天井部は回転ヘラケズリ。外面にヘラ記号をもつ。3は口径12.2cm。4～6は口縁部にかえりをもつもの。5は口径9.0cm。7は口縁部を折り曲げる。8は高杯の脚部。復元底径12.7cm。9～13

は杯身。9は内外面ヨコナデで、復元口径11.2cm、復元受け部径13.3cm。10は底部ヘラ切り後ナデ。復元口径10.0cm、復元受け部径12.0cm、器高2.6cm。11は高台が長く外方向へ張り出す。体部と底部の境に段が生じる。復外面とも磨滅のため調整不明。復元高台径8.2cm。12は幅広く低い高台が付く。復元高台径10.3cm。底部はヘラ切り後回転ヘラケズリを施す。

14は土師器甕の口縁部。15は円筒埴輪の透かし孔部分。外面はタテハケで、内面はナデ。16は取鍋か増埴。内外面とも、熱影響によって胎土中に気泡が生じ、軽石のような質感になっている。表面観察では溶着金属の痕跡は確認できない。17は土錘で、残長5.9cm、幅1.5cm、孔径0.4cm。18は内黒土器で、底部はヘラ切り後ナデか。磨滅が著しい。高台径6.8cm。19は黒色土器で、体部は内湾し、口縁部は短く外反する。20は緑釉陶器の壺の肩部。肩部の外面に2条の細い沈線文を施す。内外面とも施釉され、釉の薄い部分は明黄褐色、厚い部分はオリブ灰色を呈する。釉の表面には細かい貫入が入る。胎土は灰色で硬質。

おわりに

7世紀代を中心として土坑群が密集する状況を確認した。平面形は不定形で、掘方の立ち上がりも緩く、その多くが廃棄土坑と推測する。1次調査においても、同様の遺構を検出していたが、調査当時は遺構の全体像が分からなかったため、土器溜まりとして報告し



内領院道路1次 土器溜まり1(北から)

た⁽¹⁾(図3参照)。この土器溜まりとしたものも、包含層の下層で検出しており、出土遺物の時期も土坑群と同じである。本報告の土坑と同様の廃棄土坑と判断し、1次調査の報告を訂正する。

この廃棄土坑群は、3次調査地に集中して分布し、北側の2次調査地には見られない。3次調査地は微高地の南縁に位置しており、微高地頂部の平坦面のなかで土地利用の制限がある程度働いていたと思われる。廃棄土坑は平坦面の端に設置されたのだろう。この微高地を東に約150m進んだ地点に内橋登り上り遺跡があり、ここでも同様に、微高地の南縁で同時期の廃棄土坑が検出されている⁽²⁾。

今回の調査で検出した掘立柱建物物は1棟のみであった。ただし、掘立柱建物になる組み合わせを判断できなかっただけで、柱掘方としても申し分ない規模のビットを複数確認している。他にも掘立柱建物が存在した可能性はある。

2次調査の掘立柱建物物は、8世紀末～9世紀初頭の遺物が出土しているが、本調査の掘立柱建物は

包含層の下層から検出したものであり、7世紀代とみられる。

本遺跡の東約200mに位置する内橋坪見遺跡は、夷守駅家の可能性が高く、大宰府式瓦瓦、ベンガラが付着した開切りの軒平瓦、地域最大規模の掘立柱建物、礎石、築地塼、区画溝等が発見されている⁽³⁾。この内橋坪見遺跡の時期が7世紀後半から9世紀初頭であり、内橋鏡遺跡の掘立柱建物の時期もこの範囲に含まれる。駅家とその経営を支える雑合群の關係として位置づけられる可能性を指摘しておきたい。

出土遺物に目を向けると、特記すべきものに、権、新羅土器、取鍋または増塼がある。

権(図20-4)は滑石製の完形品で、牛頭編年V期～VI期の遺物をともなう第11号土坑から出土した。扁平な鈕と短い円柱状の身部をもち、重量は21.75gである。古代の重量単位である1大兩が41.0g～43.5g、平均41.9gとされる⁽⁴⁾ので、最大値のちょうど半分(12銖)になる。基準値の倍数であることから、定量の鍾とみられ、天秤用の権の可能性も考えられよう。形状、調整、重量の正確性などからみて、精巧に製作されたものといえる。

権の出土状況は、官衙やそれに類する公的施設関連(里長相当も含む)に集中し、中央集権的な租税徴収体制の確立にともなうもの

⁽⁵⁾と考えられる。また、駅家関連遺跡とみられる日田市上野第1遺跡⁽⁶⁾で、「豊馬豊馬」と線刻された権が出土していることから、本遺跡の権についても、夷守駅家の可能性が高い内橋坪見遺跡との関係のなかで解釈する必要があるのである。

遺物包含層出土の扁球形瓶の新羅土器(図26-35)は、粕屋町域で2点目となる新羅土器である。一つは、糟屋評価・郡衙に比定される国史跡阿志官衙遺跡で出土している。

本遺跡の新羅土器は、肩部に押捺文による装飾が施されている。頸部側から半円点文-三角文-半円点文の順に、それぞれ沈線帯のなかに1状ずつ巡らしたもので、その文様構成から7世紀前半代の時期とみられる⁽⁷⁾。

本遺跡の新羅土器に加え、隣接する内橋楠ノ木遺跡第2地点⁽⁸⁾で、甕の有溝把手が複数点出土している。朝鮮半島系の遺物であり、本遺跡付近に渡来人の存在を想定できる資料である。

最後に、ピット出土の取鍋または増塼(図27-16)に触れておく。器壁の内外面とも、熱影響によって胎土中に気泡が生じており、胎土全体が軽石のような質感になっている。表面観察では溶着金属の痕跡は確認できないものの、鋳造関連遺物とみて大過ないだろう。出土したピットは、包含層の堆積

がみられない場所にあるため、層序をもとに時期を絞り込むことはできない。ただし、前述の内橋坪見遺跡と内橋楠ノ木遺跡第2地点で製炭土坑を検出していることから、周辺の官衙において、鋳造をともなう金属器生産がおこなわれていたことを示す遺物として評価できるかもしれない。

- (1)『内橋鏡遺跡』粕屋町教育委員会2015
- (2)『内橋登り上り遺跡第2地点』粕屋町教育委員会1997、『内橋登り上り遺跡第4地点』粕屋町教育委員会2001
- (3)『内橋坪見遺跡1次・2次』粕屋町教育委員会2019、『内橋坪見遺跡3次』粕屋町教育委員会2015
- (4)松嶋順正『正倉院宝物より見た奈良時代の度量衡』『正倉院よもやま話』1989 学生社
- (5)吉村靖徳『権衡に関する一考察—福岡県出土権状製品の検討と課題—』『九州歴史資料館研究論集20』1995 九州歴史資料館
- (6)『日田市高瀬遺跡群の調査3 上野第1遺跡』大分県教育委員会2001
- (7)崔秉鉉 小池史哲・武末純一・訳『新羅後期様式土器の編年』『古文化談叢』第81集2018 九州古文化研究会
- (8)令和元年度調査。近年中に発掘調査報告書刊行予定。

図版



調査地航空写真（東上空から博多湾を望む）



内橋カラヤ道跡第2地点A区全景(北から)



内橋カラヤ道跡第2地点A区 方形罫溝掘完掘状況(北東から)



内橋カラヤ道跡第2地点A区 方形周溝墓遺物出土状況(北から)



内橋カラヤ道跡第2地点A区 方形周溝墓土層断面状況(北から)



内橋カラヤ道跡第2地点A区 方形周溝墓土層断面状況(南から)



内橋カラヤ道跡第2地点A区 方形周溝墓土層断面状況(北から)



内橋カラヤ道跡第2地点A区 木棺墓完掘状況(北から)



内橋カラヤ道跡第2地点A区 木棺墓土層断面状況(北から)



内橋カラヤ遺跡第2地点A区包含層土層断面状況(西から)



内橋カラヤ遺跡第2地点B区全景(南東から)



内横カラヤ道跡第2地点B区第1号、第2号溝状道溝完掘状況(南東から)



内横カラヤ道跡第2地点B区第1号溝状道溝取水口(南西から)



内横カラヤ道跡第2地点B区第3号溝状移行への流入口(西から)



内横カラヤ道跡第2地点B区第3号溝状道溝完掘状況(北西から)



内橋カラヤ遺跡第2地点B区第5号溝状遺構断面状況(西から)



内橋カラヤ遺跡第2地点B区[図9 A-A'右側]第1号溝状遺構(南東から)



内橋カラヤ遺跡第2地点B区[図9 B-B']第1号溝状遺構(南から)



内橋カラヤ遺跡第2地点B区[図9 A-A'左側]第2号溝状遺構(南東から)



内橋カラヤ遺跡第2地点B区[図9 C-C'左側]第3号溝状遺構(南西から)



内橋カラヤ遺跡第2地点B区[図9C-C'中央]土層断面状況(南西から)



内橋カラヤ遺跡第2地点B区[図9 C-C'右側]第4号溝状遺構(南西から)



内橋カラヤ遺跡第2地点 A 区 [方形周溝墓] (図 3-1)



内橋カラヤ遺跡第2地点 B 区 [包含層] (図 13-5)



内橋カラヤ遺跡第2地点 A 区 [方形周溝墓] (図 3-2)



内橋カラヤ遺跡第2地点 B 区 [包含層] (図 13-8)



内橋カラヤ遺跡第2地点 B 区 [第 5 号溝状遺構] (図 12-1)



内橋カラヤ遺跡第2地点 B 区 [包含層] (図 13-9)



内橋カラヤ遺跡第2地点 B 区 [包含層] (図 13-4)



内橋カラヤ遺跡第2地点 B 区 [包含層] (図 13-13)



内橋カラヤ遺跡第3地点全景（北から）〔奥は埋め戻し後の第2地点〕



内橋カラヤ遺跡第3地点SB-1、SB-2 検出状況（北東から）



内橋カラヤ遺跡第3地点SB-3 検出状況（北東から）



内橋カラヤ遺跡第3地点 SD-1 完全状況 (北東から)



内橋カラヤ遺跡第3地点 SD-1 土層断面状況 (南西から)



内橋カラヤ遺跡第3地点 [SD-1] (図9-1)



内橋カラヤ遺跡第3地点 [SD-1] (図9-2)



内橋カラヤ遺跡第3地点 [SB-1] (図4-2) 左: 内面、右外面



内橋カラヤ遺跡第3地点 [SD-1] (図10-1)



内橋縄道跡3次 調査区全景(北から)



内橋縄道跡3次 SK-1 完掘状況(北から)



内橋縄道跡3次 SK-2 完掘状況(東から)



内橋親道跡3次 SK-3 完備状況(北西から)



内橋親道跡3次 SK-4 完備状況(北から)



内橋親道跡3次 SK-5 完備状況(西から)



内橋親道跡3次 SK-6 完備状況(西から)



内橋線道跡3次 SK-7 完掘状況(東から)



内橋線道跡3次 SK-8 完掘状況(東から)



内橋線道跡3次 SK-9 完掘状況(北から)



内橋観道跡3次 SK-10, 11 土層断面状況(西から)



内橋観道跡3次 SK-14 完掘状況(東から)



内橋観道跡3次 SK-15 完掘状況(東から)



内橋鏡遺跡3次 新羅土器【包含層】(図26-34)



内橋鏡遺跡3次 須恵器杯蓋【SK-4】(図11-3)



内橋鏡遺跡3次 須恵器高杯【SK-15】(図24-3)



内橋鏡遺跡3次 紡錘車【SK-3】(図9-4)



内橋鏡遺跡3次 刀子【SK-14】(図23-3)



内橋鏡遺跡3次 片刃石斧【SK-4】(図12-20)



内橋鏡遺跡3次 <びみ石【SK-10】(図19-10)



内橋坂遺跡3次 滑石製權 [SK-11] (图20-4)



内橋坂遺跡3次 硯脚部〔包含榫〕(图26-37)

報告書抄録

| ふりがな | うらはしからやいせきだい2ちてん・うらはしからやいせきだい3ちてん・うらはしからやいせき3じ | | | | | | | |
|-------------|--|-----------|-------------|-----------------------------------|------------|------------------------------|--------|----------|
| 書名 | 内橋カラヤ遺跡第2地点・内橋カラヤ遺跡第3地点・内橋鏡遺跡3次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 粕屋町文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第51集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 西垣彰博、高橋幸作、朝原泰介 | | | | | | | |
| 編集機関 | 粕屋町教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒811-2314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目1番1号 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2020年3月31日 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 内橋カラヤ遺跡第2地点 | 福岡県糟屋郡粕屋町大字内橋字カラヤ637番5、大字戸原字義田816番5 | 403491 | 280232 | 33°37'25" | 130°27'35" | 2017.9.19 ～ 2018.2.28 | 765.8㎡ | 県道福岡東環状線 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 内橋カラヤ遺跡第2地点 | 墳墓、集落 | 縄文時代～古墳時代 | 方形周溝墓、木棺墓、溝 | 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、炭皿、青銅器、石器、木器 | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 内橋カラヤ遺跡第3地点 | 福岡県糟屋郡粕屋町大字戸原字義田818番8 | 403491 | 280232 | 33°37'29" | 130°27'36" | 2018.7.17 ～ 2018.9.22 | 372.9㎡ | 県道福岡東環状線 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 内橋カラヤ遺跡第3地点 | 集落 | 弥生時代～古墳時代 | 竪立柱建物、溝 | 弥生土器、土師器、須恵器、石器 | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 内橋鏡遺跡3次 | 福岡県糟屋郡粕屋町大字内橋字鏡595番3、598番6 | 403491 | 280231 | 33°37'20" | 130°27'34" | 2018.7.17 ～ 2018.11.16 | 203㎡ | 県道福岡東環状線 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 内橋鏡遺跡3次 | 集落、官衙関連 | 古墳時代～奈良時代 | 竪立柱建物、土坑 | 土師器、須恵器、輸入陶磁器、新羅土器、権が出土 石器、石製品 | | | | |
| 要約 | <p>内橋カラヤ遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の灌漑水路跡を検出した。近隣の戸原遺田跡にも同時期の水路跡があり、多々良川の後背湿地を利用した水田経営の様子うかがわれる。また、第1地点で検出した前方後円墳、方形周溝墓と同じ墓域を形成する新たな方形周溝墓等も確認した。</p> <p>内橋鏡遺跡では、古墳時代～奈良時代にかけて、1次・2次調査と一連の遺構を検出し、特に焼土・灰が集中する。特記すべき遺物として、新羅土器と番石製の権がある。</p> | | | | | | | |

内橋カラヤ遺跡第2地点・内橋カラヤ遺跡第3地点・内橋鏡遺跡3次 粕屋町文化財調査報告書第51集

令和2年3月31日 発行

発行 粕屋町教育委員会

〒811-2314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目1番1号（粕屋町立歴史資料館）

印刷・製本 株式会社九州カスタム印刷

〒812-0007 福岡県福岡市博多区東比恵3丁目16-15